



東北大学

ISSN 0385-7506 Vol. 30, No.4 2006



東北大学附属図書館報 木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

—木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）—

目 次

○ハイデルベルク大学図書館と15世紀の 手写本……………1	○附属図書館の概要……………31
○本学附属図書館所蔵のルーマニア・ ドイツ語文学関連資料について……………11	○会 議……………33
○検索エンジン主流時代だからこそ必要な図書 館利用者教育……………22	○人事異動……………35
○眠り猫に鳴き猫……………26	○編集後記……………36
○連載「江戸の食文化」を巡る話題から（2）： 江戸の庶民の食事情 一食卓から外食まで……………27	
○「平成17年度東北大学総長教育賞」を受賞……………30	

ハイデルベルク大学図書館と15世紀の手写本

Die Handschriften Diebold Laubers in der Universitätsbibliothek Heidelberg

情報シナジーセンター学術情報研究部 小 川 知 幸

はじめに

8月も終わろうとする、とある晩夏の朝に、私はドイツ・ハイデルベルク中央駅に降り立った。およそ1カ月かけてゲッティンゲン、シュトゥットガルト、フライブルクの大学図書館を訪問した後、最後の仕上げとなる1週間をこの町で過ごすためであった。といっても休暇ではない。私の求める資料のうちもっとも重要なコレクションがこの町に、ドイツ最古の大学に所

蔵されているからである。人口14万あまりの大学町。中央駅といっても名ばかりの郊外の小さな駅。その背の低い正面口から表に出ると、自転車が所狭しと無造作に並べられている。まだ朝の10時だというのに、濃紺の空からは灼けるような日差しが降り注いで肌を焦がそうとする。日本の夏と違い、カラカラに乾いた大気が流れ落ちる汗をその先から奪い取ってゆく。まるで火に焼かれるように、目を開けることさ

え苦痛になる。

アメリカ合衆国がハリケーン・カトリーナで大きな被害を受ける直前、ドイツでも異様な気象現象が続いていた。バイエルン州をはじめとする南東部やスイス、オーストリアでは何日も巨大な低気圧が停滞して大雨を降らせた。土砂崩れが相次ぎ、死者も出た。友人はこれを「まさしく黙示録のような天気だ」と形容した。凍えるような夏だったのである。それが突然、本来の夏を取り戻し、鬱積した分だけ強力な火塊を投げつけてきた。

パラティナ文庫

ともあれ、炎天下の通りを私は歩き出す。図書館にたどり着くまでおよそ45分、その間に私の目的を話しておこう。

1386年に創設されたハイデルベルク大学では中世歌謡写本、いわゆるマネッセ写本（Codex Manesse）がよく知られているが、この写本の母体をなすのが、16世紀に選帝侯オットハインリヒによって宮中伯の個人蔵書とあわせて寄贈された「パラティナ文庫（Bibliotheca Palatina）」である。この文庫は不幸にして、三十年戦争においてハイデルベルクが攻略されたとき、勝者バイエルン太公マキシミリアン一世により持ち去られた。ここに収められていた神学文献が狙われたのである。教皇グレゴリウス十五世に献上するためであった。この間の出来事については以下の詳細があきらかになっている。ファルツとハイデルベルクを攻略したリガの軍司令ティリーが、1622年12月にヴァティカン図書館の書記官レオーネ・アラッキを招き入れた。早くも翌月には運搬の準備を完了し、アラッキは、「俺は図書館を3つも持ち帰るのだ」と自慢している。パラティナ文庫（当時は聖霊教会に収められていた）、ハイデルベルク城の蔵書、大学の蔵書である。およそ3,500冊の手写本と13,000冊の刊本が196箱の木箱に詰め込まれ、50台の馬車に積載されて冬のさなかにアルプスを越えていった。箱が重いと言って本の装丁は剥ぎ取られ、旅中の薪にされた（木箱さえ聖霊教会の机や椅子を壊したものだ）。おまけに196箱のうち12箱はアラッキ

が自分への報酬としてヴァティカンには渡さなかったのである。

現在のパラティナ文庫はウィーン会議の取りきめにしたがって1816年にドイツに返還された一部分であり、ドイツ語で書かれた文献のみが対象になっている。わずか847冊。その他ラテン語、ギリシア語の文献は今もヴァティカン図書館に保管されている。

15世紀の手写本——ラウバー工房の手写本

近道を狙ってハウプトシュトラッセ（中央通り）の裏手のプレック通りを歩く。カフェや高級商店街で賑わう目抜き通りと違い、カレーやケバブなどアジア系レストランの目立つ狭い路地であり、クルマが通れば歩行者は壁にへばりつかねばならないほどの小路である。途中ヘーゲルが一年半ほど暮らした住まいに銘板が貼られていたが、お定まりのスプレーの落書きで汚されていた。しかし特段嫌な気もしない。これらすべての空気を吸うことが、誰かの生きた時間を教えてくれるような気がするからである。



1. プレック通り

さて、私の今回の目的はパラティナ文庫のドイツ語写本のなかにある特定の写本群であった。それは写本全盛期の14世紀ではなく、活版印刷術が発明され、普及し始めた15世紀半ばから世俗の筆写工房で制作されたものである。なかでも、エルザスにあったディーボルト・ラウバー（Diebold Lauber）の工房で制作された写本はとりわけ数が多く（80点が現存）、その生産の活発さを証明している。ラウバー写本は見た目の特異性にも驚かされる。というのは、挿画がまるで「殴り描き」なのである。人物を描くにしても、輪郭にざっと当たりをつけ、緑や茶や赤などの少ない色で大雑把に彩色される。当時の販売目録も残されており、一般的な受注生産ではなく、平積みのお店売りであったことがわかっている。

なぜこのような写本が制作されたのか。誰が欲して、どこでどのように読まれたのか。興味は尽きない。私は以前ある法学者の蔵書目録を作成し、その構成から研究の性向を探ろうとしたことがあるが、定量的な分析にはどうしても限界があった。本を所有していたことはわかるが、どう読まれたのかはわからない。そもそも実際に読まれたかさえわからないのだ。本が読者を前提とした一つのパッケージであり、個性的な物的実体だとすれば、それはいかに作られたのかという「作者性」にどうしても立ち戻らざるをえないだろう。はやりの言葉で言えば、テキストに物質性を付与すること、読者に身体性を回復することと言えばよいだろうか。「どう作られたか」は、すなわち「どう読まれたか」ということであり、さまざまな手や心の動きは形の中にとどめられているものなのである。

ともあれ、文字通り欧米各地に散在するラウバー手写本を、少なくともまとめたかたちで保管しているのがハイデルベルク大学のパラティナ文庫であり、その大学図書館の手写本・古刊本部門（Die Abteilung Handschriften und Alte Drücke）であった。日本を発つ前に、写本の閲覧を渋る部門主任をなんとか説き伏せて許可を取りつけていた。膨大な量のドイツ語を書かされた大変な作業だったが、後はすんなり、でないにしても、けっしてむずかしくはな

いと思っていた。

手写本・古刊本部門

図書館に到着した。大学広場の一角を占める赤茶色の壁。ファサードはルネサンスの様式にバロックやロココ、ユーゲントシュティルの様式が混在し、そこにパラス・アテネの頭像とバーデンの紋章を冠した一風変わった意匠である。伝統的だが新しさも感じられる。後ろを振り返るとケーニヒシュトゥールの山嶺には18世紀に廃城となったハイデルベルク城の石壁が紺青の空に映えている。私は図書館正面玄関の扉を開けて、エントランスに設置された大理石の対の階段を登り、2階の開架閲覧室に向かった。

受付で係員に紹介状を見せると、案内係の学生が手写本・古刊本部門の部屋まで道案内をしてくれるという。後について歩くと、建物内部は非常に込み入っており、右や左に何度も曲がる。時折窓外に見える中庭がかるうじて自分の位置を教えてくれるが、そうでなければすぐに迷ってしまいそうである。階には段差があり、いつのまにか2階よりも高いところに来ている。ここは4階か、5階か？ 中庭の光景は、この図書館が外から眺めるよりもはるかに巨大な建物であることを示していた。おそらく地下階の窓が見えるのだろう。どこかで水の音が聞こえるが、噴水か何かが近くにあるのかもしれない。



2. 大学図書館の中庭をのぞむ

ブザーを鳴らし、解錠を待つ。カウンターで銀髯の老紳士に素性を告げると、担当者と呼ぶという。ここは手写本・古刊本の特別閲覧室（Handschriftenlesesaal）であり、司書室のガラス戸の向こうにはおよそ20脚ほどの椅子と長机が並んでいるのが見える。細長い部屋の片側一面には薄手の白いカーテンがかかっており、時折風を孕んで揺れている。もう片側には目録類を収めた書架が並んでいる。いわゆるハンド・ビブリオテークである。年配の女性が一人、閲覧中の資料に目を落としている。

しばらくして長身短髪の若い男性が現れた。年齢は私よりも若干若いだろうか。名を名乗って握手をした。マティアス・ミラー氏、感謝を込めてここに名を記しておきたい。ミラー氏は事前に交渉した部門主任ではなく、私の到着直前に休暇を取った主任に代わり、私に対応することになった同部門の若き司書（カタログガー）だった。そして彼と私のあいだで、閲覧の可否についての議論が再燃したのだった。

閲覧交渉

「なぜ手写本を閲覧したいのか、説明してくださいませんか？」

ミラー氏が訊ねる。私は、これまでの研究がテキスト・クリティークという内容的な側面と、形態書誌学に象徴されるような資料の物質的な異同の比較という主に2つの側面から別個に進められてきたこと、文献がどのように読まれたかという問題は、テキストや挿画がいかに関与構成され、それがどのような紙にどのように書き（描き）込まれ、組み立てられているかという分析なしには読み取れないはずで、そのためにはどうしても実際の手写本を閲覧する必要があるということをかいつまんで説明した。

ミラー氏は怪訝な顔をする。「でも、手写本の多くはデジタル化してインターネットで公開しているんですよ。知ってますよね？」

もちろん知っているが、それではわからないのだ。高精細だというデジタル画像も、私の目からはさほど精細には思われない。少なくとも紙質が判別できるまでにはいたっておらず、そ

の点では私の携行した安物のデジタルカメラのほうがいくらか優れている。手写本各頁の画像に施された書誌記述もなるほど素晴らしいものではあるが、そもそも書誌記述とは目的の資料にたどり着くための道案内のようなもので、実際の資料に取って代わるものではない。

「資料がどのように読まれたかは、制作にいたる過程と利用された痕跡を一体的に捉えねばならないんです。デジタル画像では不十分なんです」

「いったい何を得心いたしますか？研究の目的は？」

「私の研究は新しい視角のもので、最終的に何が具体的にあきらかになるかはっきり申し上げることはむずかしいのですが、活版印刷が普及して手写本が駆逐されてゆく15世紀にどうしてこのような手写本が制作されたのか……おそらくは流通形態や読書行為の変容といった側面にも光を当てることができるはずです」

「でもそんなことはもう解明されて、文献に載っているでしょう？」

頭を抱えたくなってきた。解明されているなら教えてほしい。私だってヨーロッパの研究動向にそれほど暗いわけではない。

「日本に帰ってインターネットを見てください。あとあなたにできることは観光くらいですね」

さすがに舌がもつれてきた。いったんは許可が出た閲覧の交渉に、担当者が代わるだけでこうも手間取るとは！ドイツに短期間でも滞在したことがあれば、こうした経験は一度ならずあるものだが、ミラー氏はどうしても手写本を閲覧から「守り」たいらしい。

「それに、あなたの閲覧したいという資料はけっして状態がよいわけではないんです」

ごり押しするつもりはない。ハイデルベルク大学がデジタル化に熱心なのは、保存状態が良好でないことにもかわりがあるのだろう。ミラー氏はまだ怪訝な顔をしている。言葉の真意を測りかねているようにも見える。私の言葉が足りないのだろうか。

とりあえず埒があかないので、私は体勢を立て直して出直すことにした。

サウルマ教授

翌朝、私はハイデルベルク大学のヨーロッパ美術史研究所（Institut für Europäische Kunstgeschichte）に向かっていた。ラウバー写本の権威であり、ヨーロッパ史・文化学センター（Zentrum für Europäische Geschichts- und Kulturwissenschaften）のセンター長でもあるサウルマ教授に会うためである。日本にいるときメールでやりとりをしており、自分の収集した写真やマイクロフィルムを見せてあげてもよい、と温かい言葉をかけてもらっていた。研究所は図書館から歩いて5分ほどの路地裏にある比較的新しい建物であった。ネッカー川の向こう側にある自然科学・医薬系のキャンパスを除いて、旧市街にはまとまったキャンパスがないため、大学の学部や研究室は町中に散在している。



3. ヨーロッパ美術史研究所

3階の教授室手前にある秘書室をノックして声をかけると、秘書の女性が微笑みかけてきた。「あなたがオガワさんね」。ステージ上のファッションモデルのようなカラフルなドレスを身に纏い、面喰らっている私をよそに、教授からコレクションを見せるよう言いつかってるわ、と部屋に案内した。足らないものがあったら遠慮なく言ってね、お水は要るかしら、とグラスとミネラルウォーターのボトルを置いてそそくさと持ち場に帰っていった。

「教授は忙しい人なので、Sprechstundeしか

ここに来れないのよ」

何気ないことであるが、シュプレヒ・シュトゥンデという言い方が気に入った。面会時間とか診察時間という意味である。そうか、診察してもらうのか。そういえばここに来るまでの廊下には学生が数人、備え付けの椅子に座って自分の資料の分厚い束を繰っていた。一人当たり15分から20分ということなので、その雰囲気はまさに診察を待っているようであった。

教授の部屋は綺麗に片付けられており、最新式のコンピュータのわきには趣味のよい香水の小瓶が並んでいる。部屋はひんやりとして涼しい。窓を開けると熱い空気が入るといので、秘書が閉めていったが、この心地よい部屋を根城に、このあと私は彼女の膨大なコレクションを閲覧するという幸福な数日を享受することができた。

正午になってメンザ（学生食堂）に行こうと研究所の玄関を出たとき、クルマから降りて振り返った女性と目があった。「あなた、オガワさん?」「そうです、あなたは」サウルマ教授であった。こんなに突然に会えるとは予想しておらず、思わずしどろもどろになったが、9月1日のシュプレヒ・シュトゥンデに20分ほど時間が取れるのでそのときお話ししましょう、ということであった。それまで部屋は自由に使ってよいと。

この寛大さと分け隔てのなさもまたドイツらしい不思議である。

地下書庫

午後、大学図書館2階の指定の端末を使っていると、小柄な品の良さそうな女性をともなってミラー氏が現れた。日本学研究室の司書をしているコダマさんだと紹介された。どうやら私には通訳が必要だと考えたらしい。相当久しぶりに使う自分の日本語がかなりぎこちないことに戸惑いながらも、昨日説明した閲覧理由を再度説明した。

児玉さんは丁寧に通訳してくださった。ミラー氏もその説明が昨日と同じであることがわかったようであった。そこでつぎの提案がなされた。

「残念なことにここ数日は見ての通りの猛暑だから資料を閲覧室に出すわけにはいかない。その代わり1冊だけ地下書庫で見せるというのはどうだろうか？」

「それでは困るんです。私の閲覧したい資料は数点あって」

「ええ、喜んで。それでお願いします」

一瞬驚いたが、つぎの瞬間、児玉さんが突破口を開いてくれたことに気づいた。

「じゃあ、ヤッケを着てきなよ！ 地下書庫は寒いからね」

ミラー氏は、満足げに走り去っていった。

※

翌日の午後、ミラー氏、私、児玉さん、それにミラー氏の同僚の女性ツィーマーマン氏が地下書庫の前室に集合した。銀行の金庫のような鋼鉄製の扉には、暗証番号を打ち込むための端末がある。そこに閲覧室の銀髯の男性（ヘメルレ氏）が鍵を携えて現れた。全員が緊張の面持ち。扉が開かれ、細長い白い石壁の部屋に鍵付きロッカーや書架がぎっしりと詰め込まれた書庫に一人ずつ歩みを進める。通路は非常に狭い。室温はつねに18℃になるよう設定されており、湿度も低いのであろう。ひんやりするというより、むしろ乾いているように感じる。壁の荒々しい石肌には薄く白い漆喰が塗られていて、古城のケラー（地下貯蔵庫）の趣がある。



4. 地下書庫の石壁

「ラウバー写本のなかでも重要な『ドイツ語聖書（Deutsche Bibel）』を見たいのですが」

ミラー氏がおもむろにロッカーの鍵を開けて小さなブリキ缶を取り出し、いたずらっぽく差し出す。マイクロフィルムの缶のようにみえる。

「さあ、これだよ」

蓋を開けると、ジグソーパズルのピースよりずっと小さな破片がどっさり盛られており、そのそれぞれに黒い文字らしきものが書き込まれている。

「?!」

「聖書はこれだよ。インクに含まれた酸のせいで紙が浸食されてこうなった」

なるほど閲覧できないわけだ。しかしこれほど破壊されているならなぜそう言ってくれなかったのだろう。「粉々になっている」と。

手写本の閲覧

ラウバー手写本の「聖書」は自壊が進んだ資料のなかでももっとも状態の悪いものということだったが、そういうわけで私は、他の数点の資料も目にすることができた。「パルチヴァル」、「アエネイス」、「レゲンダ・アウレア」などである。児玉さんが通訳を買って出してくれたこともあり、作業はすこぶる順調に進んだ。

写本は挿画も含めて黒と緑のインクで塗られた部分が腐食している。中世における黒インクは通常、没食子酸鉄インク（Eisengallustinte）を用いており、組成としてはたんなる硫化第二鉄とタンニン酸の水溶液である。これは時間が経てば経つほど紙に食い込み黒みを帯びる。だからグーテンベルクの四十二行聖書などはまるで「刷りたて」のように今でも黒々としているのだが、ラウバーは粗悪品を用いたのだろうか、それとも結合剤などの添加物が化学変化を引き起こしたのだろうか。すべての頁ではないが、紙のインクの載った部分だけがところどころ穴が空くというより、すっぽりと脱落するように砕け落ちている。

一方、緑のインクはおそらく緑青であろう。古くなった十円玉に出てくる錆びの成分である。銅成分が紙のセルロースを分解することはよく知られている。時折、不用意な修復を施さ

れた頁に出会ったが、現在はバーデン＝ヴュルテンベルク州（ハイデルベルク、シュトゥットガルト、フライブルクなどが含まれる）の大学図書館では、すべて一つの修復センターに依頼しているということであった。

保存状態についてはここまでしよう。装丁は多少黄ばんではいるが乳白色のパーチメント、つまり安価な装丁で統一されている。本来の装丁は上述のように運搬時に廃棄されてしまったので、これはローマで再装丁されたものである。見返し紙には、たとえば「C132」のように黒インクで小さな数字が書き込まれており、ミラー氏が木箱の番号だと教えてくれた。装丁や紙の上に汚れが少ないのは、けっきょくローマはドイツ語の文献にさほど興味を持たなかったから、ということであった。



5. 紙の腐食

しばらく頁を繰っていると、紙の真ん中あたりに水平の折り目がついていることに気づいた。本のサイズは基本的にフォリオ（二つ折り）であるが、ノドの部分が不自然に締まっている。「それもラウバー手写本の特徴だよ」とミラー氏。通常、フォリオは全紙を中央で折って折丁を作るのだが、しばしばラウバーは全紙のサイズがフォリオの半分しかないにもかかわらず、これを1葉として、折らずにノドの部分で接着して丁を作った。なぜか。ツィーマン氏によれば、「サイズが大きい方が読者にアピールする」からだという。読者が「買い手」を意味す

るか否かはさしあたり措くとして、紙の価格や装丁の手間などのコストの問題、そして折り目のある見苦しい頁、物理的に耐久性の乏しい不自然な装丁法を考慮しても、非常に興味深い特徴である。それでも「読者」はこれに「満足」したのだとすれば、手写本は高価なものというイメージにラウバーは果敢に挑戦して、行き着くところまでいったのかもしれない。※註

ところで、私は、挿画のある頁の端にタブ、一種の「つまみ」が接着されていることに気づいた。紙もあるし、皮もあるが、手指の脂で黒ずんでおり、頻繁に利用されたことが推測された。これは「読まれた」証拠ではないのか。ミラー氏のコメントはとくになかったが、デジタル画像ではおそらくわからなかったであろう。これ以外にも、頁に塗られた赤インク（顔料）の色や盛り上がり方の違いは一目瞭然であり、1頁あたり少なくとも3人の手が入っていることが推測された。実際に閲覧することの大切さが改めて実感できたというわけである。

冷気で震えが来るようになり、また5人も長く書庫にいて保存環境の悪化が予想された。通常、このような書庫に入庫が許されるのは1人までだ。私も気になる頁の撮影をあらかじめ済ませたので、このあたりで作業を切り上げることにした。

※註 15世紀の活版印刷本、いわゆるインクynaブラは、およそ4万冊が刊行されたといわれている。そのうち約3万冊が現存する。しかし活版印刷本と真の意味で競合したのは手写本よりも廉価な彩色木版本であった。ただし写本は単純に衰退したわけではなく、15世紀末から16世紀にかけては『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』に代表されるような豪華写本が全盛となる。

シュプレヒ・シュトゥンデ

9月1日、サウルマ教授とのアポイントメント。午前中に汗だくになったので身嗜みを整えようと滞在中のホテルに戻り、シャワーを浴びたのだが、歩いているうちにまた汗だくになってしまった。ハンカチが絞れるほどである。照れくささもあって挨拶もそこそこに、単刀直入

ラウバー手写本の大きな特徴である挿画について質問をぶつけてみた。

「多くの写本と違って、ラウバー手写本の挿画はあまりにも素っ気なく、ある種乱暴であり、手描きというより廉価な木版画に近い気がします。「つまみ」も挿画の部分に取りつけられており、ラウバー写本とは一種の図説のようなものではなかったのでしょうか」

彼女は一瞬思索してこう答えた。

「それはJaでもあり、Neinでもあります」

「挿画はテキストを構造化するために設けられたのだと考えています。「栞」(私の言う「つまみ」)も挿画ではなく、章立ての始まりに取りつけられているのですよ。」



6. 「つまみ」

サウルマ教授が言うには、テキストは写本が制作された200年以上も前の物語であり、それだけでは、そこに現れる情景や行為がどのようなものであったか、当時の人々にもすでに理解できなくなっていた。とくに宮廷文化の中で女性が着ていた衣装などは到底知りえない。そこで挿画はテキストと読者の橋渡し、いわば翻訳を行うためのものとして置かれていたのであった。

「写本の紙面は、ほとんど汚れのないキレイな状態でした」

「そうです。朗読者と聴衆がいたのです」

私の中で浮遊する想像の断片が急速に一つになった。ラテン語で「読む」を意味する動詞

legereには、「耳を澄ます」という意味もある。すなわち読書とは「朗読すること」であり、

「聴き耳をたてること」であった。これが別個にはではなく、まさに同時に行われていたのである。読書共同体とでも言えばよいだろうか。朗読者はいわば演技手でもあったのだろう。彼(女)は挿画を見ながら、身振り手振りを交えて朗読する。読書とは、われわれが今日考えるような黙読や個人の愉しみではなく、演奏会や芝居のような「再演」であり、想像を共有する場であったのである。ラウバー写本のラフな挿画は、その意味で、いわば譜面や台本の役割をはたしていたといえるのではないだろうか。

写本の制作現場に戻ろう。写本は基本的にテキストの書き手と挿画の素描手と挿画手の3人のチームによって制作された。人材を雇用し、このチームを複数にすることで生産効率が高められた。ところで、ラウバー工房では書き手の名前は知られているが、素描手と挿画手についてはほとんど知られていない。おそらくこれらは臨時雇いのようなかたちであったのだろう。工房では素描手と挿画手には熟練を必要とせず、彼らは備え付けの「見本帖」を見ながら、まさに走り抜けるようなスピードで挿画を「複製」していったのである。挿画が極端に類型化され、まるで木版画のように紋切り型であるのはそのためであった。これがラウバー工房の生産力の秘密である。一方、「読者」も緻密な挿画など望んでいなかった。その規格化されたレイアウトにより、工房の手写本は一種の「ブランド」でさえあったとサウルマ教授は指摘する。

「ところで」と私は言う。大半のラウバー手写本の状態は(少なくともハイデルベルクで見た限り)決してよいとは言えませんね。

「そうね。いったん修復センターに行ってしまうと、半年か1年は戻ってこないわ」

とにかく閲覧は困難です。昨日は地下書庫に入庫していくつか資料を見せてもらいましたけど。

「それは例外中の例外ですよ!」

突然の衝撃であった。私はようやく自分の間違いに気づいた。ミラー氏は本当に、私の要求

の真に目的とするところを探っていたのだった。

「私も入ったことはないのですよ！」

私は表面しか見ず、軽口にだまされていた。自分に恥じ入った。そうだ。彼は私自身が説明しきれなかった目的を突き止めようとして通訳の女性まで連れてきてくれた。そして自分のできる最大限の範囲で職務を果たそうとしたのである。私は自分の要求の正しさばかりを信じ、つまらない矜持に囚われていたのだろう。本当に手写本が見たければ、すがりついてでも懇願すればよいのである。相手の厚意をどこかで期待していた。自分の心の貧しさを思い知った。

ふたたび閲覧室

金曜日、私はふたたび手写本・古刊本部門のブザーを押していた。ヘメルレ氏に取り次ぎを求めると、まもなくミラー氏が姿を見せた。

「今日はお礼を言うために来たんです」

「きみはラッキーだったよ。明日ぼくとツィーマン氏は出かける予定だからね」

こういう場合、相手にラッキーと言うかな、と思いながら、昨日サウルマ教授に「例外中の例外」だと言われたこと、閲覧にあたって大変な親切を受けたことに素直に礼を述べた。

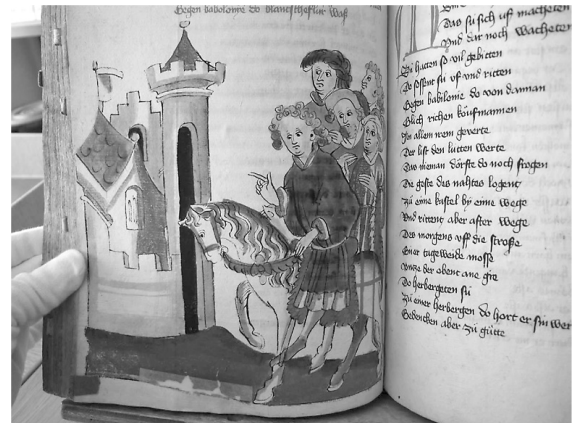
「ぼくたちは必要な人にはもちろん閲覧してもらっているんだから」

「私はラッキーでした」

二人して笑った。

さて、もう一つおまけがあった。ラウバー手写本のなかでもっとも保存状態の良いものとして、私は閲覧室で、中世冒険譚「フローレとブランシェフルール」(Flore und Blanscheflur)の写本をじっくりと眺め、触り、撮影することができたのである。

昨晩は、にわか雨が降り、今朝の日差しも少し和らいでいた。人知れずまた秋が戻ってきていた。



7. 「フローレとブランシェフルール」

参考文献

Fasbender, Christoph: hübsch gemolt - schlecht geschrieben? Kleine Apologie der Lauber-Handschriften, in: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 131, 2002, S. 66-78.

Fechter, Werner: Der Kundenkreis des Diebold Lauber, in: Zentralblatt für Bibliothekswesen 55, 1938, S. 121-146.

Kautzsch, Rudolf: Diebold Lauber und seine Werkstatt in Hagenau, in: Centralblatt für Bibliothekswesen 12 (1895), S. 1-32, 57-113.

——: Diebold Lauber und seine Werkstatt. Eine Nachlese, in: Archiv für Buchgewerbe und Gebrauchsgraphik 63, 1926, S. 42-45.

Kurth, Betty: Handschriften aus der Werkstatt des Diebold Lauber in Würzburg, Frankfurt und Wien, in: Jahrbuch des kunsthistorischen Institutes der k.k. Zentralkommission für Denkmalpflege 8 (Beiblatt), 1914, S. 5-18.

Ott, Norbert H.: Die Handschriften-Tradition im 15. Jahrhundert, in: Tiemann, Barbara (Hrsg.): Die Buchkultur im 15. und 16. Jahrhundert (Veröffentlichung der Maximilian-Gesellschaft. Jahresgabe der Maximilian-Gesellschaft) 1. Halbband, Hamburg 1995.

Saurma-Jeltsch, Lieselotte E.: Spätformen mittelalterlicher Buchherstellung. Bilderhandschriften aus der Werkstatt Diebold Laubers in Hagenau, Wiesbaden 2001.

東北大学附属図書館

Traband, Gérard: Diebolt loubet scribe zu hagenowe, in: Etudes Haguenviennes N.S. 8, 1982, S. 51-92.

Yukishima, Koichi: Incunabula in Japanese Libraries (IJL2), Tokyo 2004.

Vernissage. Die Zeitschrift zur Ausstellung: Die Universitätsbibliothek Heidelberg. Kostbarkeiten gesammelter Geschichte, 5/00 8. Jahrgang 63, 2000.

戸叶勝也『ドイツ出版の社会史』三修社, 1992年
凸版印刷株式会社 印刷博物誌編纂委員会編『印刷博物誌』紀伊國屋書店, 2001年

宮下志朗『書物史のために』晶文社, 2002年
リュシアン・フェーヴル / アンリ＝ジャン・マルタン (関根素子・長谷川輝雄 他訳)『書物の出現』筑摩書房, 1985年

R. シャルチエ (福井憲彦 訳)『読書の文化史 テクスト・書物・読解』新曜社, 1992年

ロジェ・シャルチエ (長谷川輝夫 訳)『書物の秩序』ちくま学芸文庫, 1996年

高宮利行「写本から印刷へ——グーテンベルク聖書を考える (2)中世の写本生産」『図書』578, 岩波書店, 1997年7月, 44-49頁

——「写本から印刷へ (3)木版本」『図書』579, 岩波書店, 1997年8月, 44-49頁

竹中京子・福西まり子「ドイツ図書館訪問記」『神戸大学附属図書館報』Vol. 11 No.1, 2001年4月
(<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kanpo/11-1/11-1-6.html>)

中尾重宏「文庫紹介2 パラティナ文庫」1994年4月 (<http://www.iris.dti.ne.jp/~nakao/library2.html>)

福本直之「西洋中世古写本学提要」『創価大学総合文化部 一般教育部論集』第24号, 2000年2月, 1-30

頁

三浦尤三「ハイデルベルク宮廷文庫『Bibliotheca Palatina』の略奪と旧蔵ラテン語写本『Codices Palatini Latini』のその後」『活水論文集 家政科・一般教育音楽科編』第30集, 1987年3月, 63-86頁
ロジェ・シャルチエ (宮下志朗 訳)「フーコーのキアスム——科学と文学のあいだの作者性, 18世紀～14世紀」『書物の言語態』(シリーズ言語態3), 東京大学出版会, 2001年, 205-230頁

ハイデルベルク大学図書館ホームページ

<http://www.ub.uni-heidelberg.de/>

(大学図書館のプロフィールは, ほとんどすべてここから入手可能である)

(おがわ・ともゆき)



ハイデルベルクの街並み

本稿は平成17年度科学研究費補助金 (若手研究 (B)) による成果の一部である。

2 ルーマニア・ドイツ語文学とは何か

現在、ドイツ語圏と一般に考えられているのは、ドイツ、オーストリア、スイスのドイツ語地域、リヒテンシュタインである。だが、第一次世界大戦以前は、ハプスブルク帝国領やドイツ帝国領の東部境界線まで、つまり現在のポーランドやウクライナの西部地域、ルーマニアの北西部地域等を包含していた。その後、第一次世界大戦敗戦を契機に両帝国は解体され、これらの地域は再編される。ルーマニアもこの過程で、ハプスブルク帝国よりブコヴィナ、トランシルヴァニア、バナート等の地域を獲得し、版図を大きく広げたが、同時に多数の非ルーマニア語母語話者を自国民として抱えることになった。ドイツ語母語話者もまた、マイノリティとして生きることを求められた。1930年の国勢調査によれば、全人口約1605万7000人中76万人余りが、ドイツ語を母語として申請している。⁴そして、これらの人々は、20世紀の激しい政治的変動に翻弄されながらも世代を超えて、ルーマニア国内で、あるいは国外の移住先で、ドイツ語による文学営為を続けていった。「ルーマニア・ドイツ語文学」とは、彼らにより展開された文学営為およびその作品をいう。

ところで、ルーマニアのドイツ語母語話者といっても同質の集団ではない。彼らが言語や文化に基づくアイデンティティを共有し始めたのは、20世紀初頭に至ってのことである。それ以前からこの地域には、ドイツ系あるいはドイツ語を母語とするユダヤ系住民の大規模な居留地が複数あった。だが、相異なる宗教的社会的背景ゆえに、居留地間の積極的な交流は行われていなかった。トランシルヴァニア（ドイツ名、ジーベンビュルゲン）のドイツ系住民、いわゆるジーベンビュルガー・ザクセン人は、農業や鍛冶等の技術移転のために乞われて12世紀にこの地に移住した古くからの集団で、国王から特権を付与され、教育水準も高く、1552年

という非常に早い時期からプロテスタントとして信教の自由を享受していた。他方、バナートのドイツ系住民、いわゆるバナート・シュヴァーベン人あるいはドーナウ・シュヴァーベン人は、マリア・テレジアの植民政策により18世紀に成立した集団で、カトリックの農民が中心である。また、1775年にハプスブルク帝国領となり19世紀に大きく発展したブコヴィナには、農民を中心とするブコヴィナ・ドイツ人と、ヨーゼフ2世の植民およびドイツ化政策により社会的地位を上昇させて都市部で活躍したユダヤ系住民がいた。後者は第二次世界大戦中、ナチス・ドイツと同盟関係にあったアントネスク軍事独裁政権下で強制収容所への大量移送と大量殺戮を体験する。また第二次世界大戦後、北部ブコヴィナがソ連邦ウクライナ領となると、ユダヤ系住民の大多数は故郷を離れた。ルーマニア国内に残った者もいたが、ヨーロッパ各国のみならず、アメリカ、イスラエル、ブラジル等に移住した者も多い。ルーマニア・ドイツ語文学の担い手たちは、これら諸居留地の（旧）住民の総体から成っており、居留地ごとに歴史的文化的背景は異なる。しかもこの相違は、第一次世界大戦前後に相互交流が試みられるものの、その後第二次世界大戦中にかけて、ナチズムに対する立場の顕著な相違となって表れ、より尖鋭化された。

その事情は、社会主義体制成立後のルーマニア国内における文学活動にも影響を及ぼし続けた。以後の文学は体制と一体となって展開していき、詩人や作家たちは、社会主義リアリズムの圧迫やチャウシェスク体制初期の「雪解け陽気」等、体制による制約の変化という点では同じ前提に立つことになった。だが各居留地の歴史的経験は、なお作品に影を落としている。1961年に第1巻が刊行されたパウル・シュスター(Paul Schuster, 1930-2004)の長編小説『5リットルのツイカ酒(Fünf Liter Zuika)』は、ジーベンビュルガー・ザクセン人の村を舞

⁴Recensământul general al populației României din 29. 12. 1930, vol. II: Neam, limba maternă, religie (București 1938). Zitiert nach; Othmar Kolar, Rumänien und seine nationalen Minderheiten 1918 bis heute, Wien (Böhlau) 1997, S. 553.

台に、中世ドイツ語に近いといわれるザクセン方言の古めかしい響きをたたえた言い回しとくだけた口語的表現とが入り混じった文体で、両次大戦間期の村の日常にナチズムへの誘惑が忍び寄る様を描いている。そして敢えてこの題材と文体に取り組んだ作家の試みは、ナチズムの被害者となったブコヴィナのユダヤ系住民、カトリックが主流でナチズムから距離をとった作家たちもいたバナートのドイツ系住民に対し、プロテスタントを主流とするジーベンビルガー・ザクセン人たちがナチズムに著しい同調を示し、戦後もそのために指弾され続けたという背景を踏まえてはじめて、適切に評価されるのである。各居留地を横断する共通の基盤に立つものとしてのルーマニア・ドイツ語文学について語ることができるのは、おそらく、戦後生まれの詩人や作家たちが、多感な十代の頃に経験した「雪解け陽気」の中で建設的な社会批判の可能性を信じ、やがて挫折していく1970年代以降ではないかと思われる。

第二次世界大戦後の東西冷戦構造のなか、後には東側諸国とも一線を画したルーマニアの体制の厚い壁に囲われ、ルーマニア・ドイツ語文学は独自の展開を遂げたが、その存在が国外、とくに西側に知られることは少なかった。だがチャウシェスクの独裁体制が国民に対する抑圧を一層強めていった1970年代後半以降、西側に亡命する詩人や作家が次第に増え、当時の西

ドイツに活動拠点を移しはじめたことから、注目を集めることになる。1980年代の西ドイツでは、東西ドイツ、オーストリア、スイスに次ぐ「第五のドイツ文学」としての認知を得るに至った。⁵しかしその後、1989年の東欧革命のなかでチャウシェスク体制が崩壊し東西を隔てていた壁が消えたとき、ルーマニアのドイツ系住民は大挙してドイツへ出国し、マイノリティとしての求心力を決定的に失った。⁶購読者が激減したため、ドイツ語新聞や雑誌は多くが廃刊や縮小を迫られ、ドイツ語の著作を専門に扱っていた出版社も閉鎖された。⁷著名な研究者や編集者たちも資料を携え、故郷を離れた。そして彼らは、自らのアイデンティティを確認するかのごとく、ドイツで積極的に活動を始めたのである。東欧革命はこの文学の「終わりの始まり」ともいえる事態を招来し、同時に、ドイツにおける本格的な学術的議論の可能性を拓くことにもなった。

2 ルーマニア・ドイツ語文学の受容と研究状況

上記のような事情から、ルーマニア・ドイツ語文学はドイツやオーストリアでも1990年代以降にようやく基礎資料が整い出し、それに伴う受容や研究の可能性が広がりつつある分野である。

それまで主に受容の対象となっていたのは、パ

⁵ Vgl. Rene Kegelmann, „An den Grenzen des Nichts, dieser Sprache...“ *Zur Situation rumänien-deutscher Literatur der achtziger Jahre in der Bundesrepublik Deutschland*, Bielefeld (Aisthesis) 1995, S.7.

⁶ 体制転換から5年の間にルーマニアからの帰還移住者(Aussiedler)としてドイツ連邦共和国に登録された者は17万1900人にのぼり、そのうちの11万1500人は1990年に登録されている。Vgl. Jahresstatistiken des Bundesausgleichsamtes (Az.: I/2-Vt. 6380). Hier zitiert nach: Walter König, *Die Deutschen in Rumänien seit 1918*. In: *Die Deutschen in Ostmittel- und Südosteuropa. Bd.1*, hrsg. von Gerhard Grimm und Krista Zach, München (Südostdeutsches Kulturwerk) 1995, S. 278.なおケーニヒは、1989年初頭の人口として約20万人という数字を挙げ、ドイツ政府の帰還移住者登録における人数がルーマニアのドイツ系住民の人口減少数をはるかに上回っていると指摘している。彼はその理由を、1992年のルーマニア国勢調査において、以前はドイツ系と申告しなかった者で、自らをドイツ系であると申し立てるようになった者が数多く存在したためであると説明している。Vgl. König, a.a.O., S. 279.

⁷ この点については、拙文「ルーマニアのドイツ系マイノリティを訪ねて」(『ドイツ文学』日本独文学会, 101号, 1998年, 154-156頁)で報告した。

ウル・ツェラン(Paul Celan, 1920-1970)やローゼ・アウスレンダー(Rose Ausländer, 1901-1988)のようなルーマニア国外で活動したブコヴィナ出身のユダヤ系詩人、あるいは1970年代後半から80年代にかけて西ドイツに出国した戦後世代の作家とその作品である。しかし、前者に関していえば、研究の重点はもっぱら戦後の作品におかれ、詩作活動の出発点となった時期は等閑にふされる傾向が強い。とりわけ20世紀でもっとも重要なドイツ語詩人の一人とされるツェランについては、1950年代から(西側)ドイツ語圏諸国ですでに高い評価を受けていたにもかかわらず、第二次世界大戦後にブコヴィナを離れるまでの時期を視野に収めて研究がはじまったのは没後10年近く経った1970年代末以降だった。アウスレンダーも受容が進むのは1970年代以降である。そのうえ、ブコヴィナ出身の他の詩人たちはツェランやアウスレンダーの伝記的事実に関連して目を向けられることが大半で、文学的評価の対象となることは少なかった。

他方、戦後世代のルーマニア・ドイツ語作家は、1980年代に注目を集めた。とりわけ1982年に刊行されたヘルタ・ミュラー(Herta Müller, 1953-)の小説『低地(Niederungen)』は、西側ドイツ語圏諸国に衝撃をもって受け容れられた。作中で子供の目から描かれているバナート・シュヴァーベン人の村の日常は、絶えず子供の心を苛んでいく頑迷固陋な小世界であり、それまで流布していた歴史の犠牲者としてのルーマニア・ドイツ人像を大きく相対化する内部者の告発として受け取られた。簡潔でありながら表象力に富む言語表現もまた、鮮烈な印象を残した。しかし、研究対象としては、ルーマニア出国後の作家たちの展開を見定める必要もあり、またルーマニアで活動していた時期に関する資料等の入手や取り扱いについても問題があるために、今後に委ねられている。

ルーマニア・ドイツ語文学に連なる作家たち

で上記二つの範疇に属する者以外は、これまで各居留地の同郷人会関係者が目を向けるのみであった。同郷人会との密接な関係を持たない諸機関では、ルーマニア・ドイツ語文学を含め東ヨーロッパのドイツ系マイノリティの歴史や文化に関して、学問的に取り組むこと自体、躊躇する傾向にあった。その背景には、「在外ドイツ人(Auslanddeutsche)」の存在が19世紀のナショナリズムの流れのなかで〈発見〉され、第二次世界大戦に至るまで、「在外ドイツ人」の居住地域の歴史や地理、文化等に関して広範な学術的研究が行われたという経緯がある。⁸その過程で、東ヨーロッパのドイツ系マイノリティには「ドイツの文化的前哨」という機能了解が賦与された。この過去とどのように対峙するかという問題は、ドイツ系マイノリティの歴史や文化を語るうえでの立場を明確化する試金石となるのであるが、その歩みは始まったばかりである。

1990年代に至るまでドイツ、オーストリアで入手できる資料や情報は限られていたこともあり、ルーマニア・ドイツ語文学研究では、従来、ルーマニア国内のドイツ語母語話者研究者に負う部分が非常に大きかった。そして彼らが(西)ドイツに出国した場合は、同郷人会系機関で活動することが多かった。そのため、基礎資料の収集や基礎研究の面で現在もなお、ルーマニア出身者を中心とする同郷人会系の研究機関が大きな役割を果たしている。しかし東欧革命以後の動向を踏まえ、ようやくドイツやオーストリアの諸大学もこの分野の研究に本腰を入れ、同郷人会系研究機関との連携を強め始めた。グンデルスハイム・アム・ネッカーにあるジーベンビルゲン研究所(Siebenbürgen Institut)は2003年3月より、ハイデルベルク大学東欧史講座の附置研究所となった。ミュンヘンにある東南ヨーロッパ・ドイツ文化歴史研究所(Institut für deutsche Kultur und Geschichte Südosteuropas)も2004年からミュンヘン大学の

⁸ Vgl. Alexander Ritter, Germanistik ohne schlechtes Gewissen. Die deutschsprachige Literatur im Ausland und ihre wissenschaftliche Rezeption. In: *Deutschsprachige Literatur im Ausland*, hrsg. von demselben, Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1985, S.10-34.

附属機関となり、ドイツ語ドイツ文学研究専攻の学生向けに講義や演習を提供している。

またルーマニアでは、体制転換後、それまでの研究の主たる担い手であったドイツ語母語話者が大挙して出国してしまった一方、ドイツやオーストリアとの学術交流が飛躍的に盛んになり、外国からの資金援助も可能になった。そのため、ルーマニア独文学会を中心に、ドイツやオーストリア側諸機関との共同研究が進みつつある。⁹

このような状況のなか、日本におけるルーマニア・ドイツ語文学の受容は緒についたばかりである。詩人として声望の高いツェランについては、従来から数多くの研究論文が執筆され、作品や研究書も翻訳され刊行されていた。しかしドイツやオーストリアでの状況と同様、長い間、彼のブコヴィナ時代が研究の視野に入ることとはほとんどなかった。出身地ブコヴィナでの最初期に焦点をあて、1979年の刊行後はドイツ語圏でのツェラン研究に大きな影響を与えたイスラエル・ハルファンによるツェランの伝記が翻訳され刊行に至ったのは1996年である。¹⁰ また、ブコヴィナのドイツ語詩人たちについて日本ではじめて包括的に紹介した労作として、1988年発表の若槻俊介氏の論文「ブコヴィナーかたすみに置き去られたドイツ詩の一地方」¹¹

を挙げることができる。しかしこの論文も、ルーマニアのドイツ系マイノリティ全体に対する関心を喚起するには至らなかった。東欧革命を経て、ようやくこの分野での研究が始動し、ルーマニアのドイツ系マイノリティの歴史や文学に焦点を当てた論文が発表されることになる。¹² 1998年には、ミュラーの小説『狙われた狐(Der Fucks war damals schon der Jäger)』(1992)が翻訳刊行された。¹³

それにしても、ルーマニアからはるか離れた日本の研究者がルーマニア・ドイツ語文学研究に携わる意味はどこにあるのか。筆者は第一にそれを、二重の意味での「過去の克服」の試みであると考えている。

一つには、前述のように、ドイツ語圏の研究者にとってこの分野の研究は、19世紀以来の「在外ドイツ人」研究の過去もあいまって、過剰なまでの政治的意味を持っている。一部では禁忌さえ生じている。そのため、直接の当事者とは多少異なる立場からこの歴史にアプローチできる研究者が必要だと考えるのである。一例を挙げれば、ドイツの同郷人会系研究機関では、第二次世界大戦中のルーマニアにおけるユダヤ人大量殺戮でドイツ系住民が果たした役割や1933年以降ドイツ系詩人とユダヤ系詩人との間に生じた摩擦や断絶について、具体的に語ら

⁹ Vgl. Kyoko Fujita, Die Gesellschaft der Germanisten Rumäniens (GGR) und ihre Tätigkeiten. Die Geschichte und die Gegenwart der Germanistik in Rumänien. In: *Neue Beiträge zur Germanistik Band 2 / Heft 3*, hrsg. von Japanische Gesellschaft für Germanistik, München (iudicium) 2003, S. 218-222.

¹⁰ イスラエル・ハルファン『パウル・ツェラーン 若き日の伝記』(北彰, 相原勝訳) 未来社, 1996年。

¹¹ 『宇都宮大学教養部研究報告』第21号第1部, 1988年, 199-231頁所収。

¹² 主な業績を発表順にいくつか挙げる。北彰「もうひとつのオーストリア文学—アウスレンダーのチェルノヴィッツ」(中央大学人文科学研究部編『陽気な黙示録—オーストリア文化研究—』中央大学出版部, 1994年, 409-435頁)。藤田恭子「〈父なる国〉と〈母なる国〉の狭間で—ローゼ・アウスレンダーにおける〈故郷〉の意味—」(『言語と文化』東北大学言語文化部, 第4号, 1996年, 159-182頁)。鈴木道男「ルーマニアのドイツ言語語島の文化的意味について—I. 三つの言語島の過去と現在—」(『言語と文化』東北大学言語文化部, 第8号, 1997年, 125-144頁)。エーリカ・ニールセン「歴史状況と地域文化—現代ルーマニア・ドイツ語文学の現状について—」(藤田恭子訳, 『言語と文化』東北大学言語文化部, 第8号, 1997年, 159-182頁)。小泉淳二「バナート生まれの作家リヒャルト・ヴァーグナーについて」(『人文科学論集』茨城大学人文学部, 第30号, 1997年, 101-131頁)。

¹³ ヘルタ・ミュラー『狙われた狐』(山本浩司訳) 三修社, 1998年。

れることはない。ジーベンビュルゲン研究所長ハラルト・ロート(Dr. Harald Roth)氏が1997年に発表した『ジーベンビュルゲン小史』では、1933年のナチの政権奪取から1945年の第二次世界大戦終戦までの叙述に、全199頁中わずか3頁が割かれているのみである。¹⁴禁忌されたこれらの問題については、直接の当事者でないことで検証が容易になる部分もあると思われるのだ。

もう一つの意味での「克服」とは、国民国家や国民文化といった理念を前提として捉えられた「ドイツ文学」像についてである。ドイツ・ナショナリズムの展開と並行して形成されてきたドイツ語ドイツ文学研究のあり方は、日本のドイツ語ドイツ文学研究史にも決定的な刻印を与えている。その残像が自らの内部にもあることを、筆者自身も自覚せざるをえない。そのため、ドイツ語による文学営為を意識して周縁から見つめ、その多様性を理解することにより、「ドイツ語文学」の営み全体を新たな地平で捉える一つの契機にしたいと願っている。

加えていえば、ルーマニア・ドイツ語文学はマイノリティの文学として、またディアスポラの文学としても、多言語多文化社会の中での展開を余儀なくされてきた。ルーマニア語、ウクライナ語、ハンガリー語等の文学との密接な交流があり、またアメリカやイスラエル等の移住先ではマジョリティの文学営為に対し、自らの存在意義を模索し続けた。この文学の多元文化性を解明することもまた、現代的意味を持つのである。

4 本学所蔵資料の主要雑誌および図書

本学所蔵の資料に話を戻そう。

アウスレンダーの作品に出会ったことを契機に、筆者がルーマニア・ドイツ語文学研究に携わるようになったのは、10年程前のことである。当時、この分野に関する資料は日本ではごく少数で、¹⁵基本的な文献資料収集等の研究基盤整備から出発せざるをえなかった。筆者は平成9-10年度科学研究費補助金萌芽的研究「マイノリティ文学としてのルーマニア・ドイツ語文学の歴史と現在」(研究代表者)の採択を契機に、基礎文献収集に着手した。以来、7件の科学研究費補助金等による支援を得て、可能な限り文献の入手に努めている。しかし、二次文献資料に関してはともかく、ルーマニアで刊行された図書や新聞、雑誌等の一次文献資料を入手することは非常に困難だった。

本稿の冒頭で挙げた『新文芸(Neue Literatur)』もその一例である。この文芸誌は1949年にバナートの州都ティミショアラで『バナート著作集』というタイトルの下に創刊された。1956年に首都ブカレストへ編集部が移り、『新文芸』と改称したが、巻号は引き継いだ。当局の統制と検閲下にあったが、ルーマニア・ドイツ語文壇で名のある詩人や作家、文芸批評家ほぼ全員が、この文芸誌を発表の場としており、第二次世界大戦後のルーマニア・ドイツ語文学を語るうえで不可欠の資料である。1989年の体制転換を経て1990年春に合併号が発行された後、紙と資金の不足、編集部員のルーマニア出国等で休止を余儀なくされた。1991年にもう一度合併号が刊行され、その後、雑誌の目的を変えて、新シリーズとして継続されることになったが、1999年に休止されたままになっている。

前述したように、ドイツ、オーストリア、スイスのドイツ語地域には全巻揃っている図書館

¹⁴Harald Roth, *Kleine Geschichte Siebenbürgens*, Köln; Weimar, Wien (Böhlau) 1997.

¹⁵このとき改めて、本学附属図書館の懐の広さを痛感した。在外ドイツ人研究、とくにブコヴィナ研究で著名なライムント・フリードリヒ・カインドル(Raimund Friedrich Kaindl, 1866-1930)の著書が6冊も所蔵されていたのである。本稿に直接関わる著作としては、以下のものがある。*Die Deutschen in Galizien und in der Bukowina*, Frankfurt a.M. (Keller) 1916. *Geschichte der Deutschen in den Karpathenländern. 2Bde.*, Gotha (Perthes) 1907. *Geschichte der Deutschen in Ungarn. Ein deutsches Volksbuch*, Gotha (Perthes) 1912.

はない。この分野ではジーベンビュルゲン研究所や東南ヨーロッパ・ドイツ文化歴史研究所、テュービンゲンのドーナウ・シュヴァーベン歴史地誌研究所(Institut für donauschwäbische Geschichte und Landeskunde)等同郷人会系諸機関が最も充実した資料を揃えているが、それらの図書館も創刊号は所蔵していない。ベルリン国立図書館運営のドイツ図書館所蔵雑誌データベースでは、「1951-1955年、確認済」となっており、1949年の創刊号は未確認であることが示唆されている。

1998年春にブカレストを訪れ、『新文芸』の発行に携わっていた『ルーマニア一般ドイツ新聞(Allgemeine Deutsche Zeitung für Rumänien)』編集長で文芸評論家でもあるエメリヒ・ライヒラート(Emmerich Reichrath)氏にバックナンバー全巻入手の可能性を尋ねた際にも、否定的な答えだった。1989年の体制転換直後、短期間で10万人以上のドイツ系住民がルーマニアを出国し、『新文芸』編集部もまたドイツへ移動した。その際の混乱が大きな要因になっているという。実際、ドイツ語圏の古書データベースに目を配っても、ごく部分的に、大抵は1970年代か80年代のナンバーが提供されるにとどまっていた。

しかし2002年秋にルーマニア出身の作家クラウス・シュテファニー(Dr. Claus Stephani)氏と交流が始まったことで、事態は好転した。シュテファニー氏は『新文芸』の編集者だった方で、現在は東方ユダヤ人の伝承等の収集に携わるかたわら、作家として活躍している。日本に研究基盤を構築したいという筆者の希望を理解してくださると、人脈を辿って『新文芸』のバックナンバーを探して下さった。その結果、翌2003年に、1959年の第10巻から1989年の第40巻まで3冊を除いてほぼ全巻、330冊余りの『新文芸』が東北大附属図書館に納入された。そして昨年、氏を介して、ある文芸愛好家が遺された蔵書のうち、図書と雑誌を合わせ、約700冊を購入する運びとなった。これにより、『バナート著作集』と後継誌『新文芸』は、ドイツ語圏の図書館でさえ確認していない創刊号から1989年の第40巻まで、1冊を除いて揃っ

たのである。

東北大学附属図書館がこの3年間に受け入れた1,000冊余りの文献資料には、二つの特徴がある。第一は、雑誌資料の充実で、収蔵雑誌数は700冊余りにのぼる。第二に、ジーベンビュルゲンとバナート出身の詩人や作家に重点をおいて、まとまった数の図書を所蔵できたことである。とりわけ兩次大戦間期に活躍した両地域出身の作家については、これまで資料入手が難しかった。その空白を今回の資料受け入れで、ある程度埋めることが出来た。以下、それぞれの内容について紹介する。

a) 雑誌資料

雑誌に関しては、前述したように『バナート著作集』と後継誌『新文芸』がほぼ揃った。加えて、20世紀前半に刊行された重要な文化雑誌が数種類、また社会主義時代の文化雑誌および新聞年鑑も収蔵された。主たる雑誌と所蔵冊数およびその発行年を以下に挙げる。



『カルパチア山脈』

- 『カルパチア山脈(Die Karpathen)』 (1907-1914) 54冊(1908-1913)
- 『東方の地(Ostland)』 (1919-1931) 96冊 (1919-1921, 1926-1931)

東北大学附属図書館

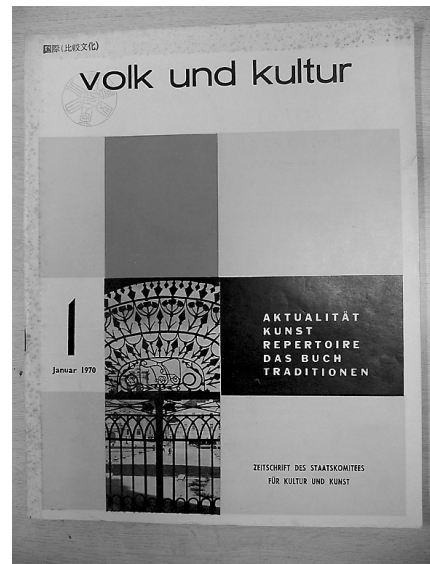
- ・『人民と文化(Volk und Kultur)』
(1949-1985, 1990-1991) 163冊(1958,
1967-1972, 1974-1985, 1990)
- ・『年鑑 新しい道(Neuer Weg Almanach
[Kalender])』(1950-) 23冊(1960-1989)

『カルパチア山脈』と『東方の地』は、トランシルヴァニア地方のブラショフで刊行された文化雑誌である。『カルパチア山脈』は隔週刊なので、収蔵されたのはごく一部だが、『東方の地』は欠落が少ない。1919-1920年および1928-1930年については全号揃った。この雑誌を所蔵している機関はドイツにはない。オーストリアでは1926-1931年に刊行された号のみ、オーストリア学術アカデミーおよびウィーン工科大学図書館に所蔵されている。1919-1921年刊行分については、所蔵の記録がない。

両誌は20世紀初頭のトランシルヴァニアで、地域の枠を超えたドイツ語文化の営みを目指して創刊された。またこの意図に基づき、主要ドイツ語圏、さらにはヨーロッパにおける文化的諸潮流を紹介するとともに、ルーマニア国内の他のドイツ系住民居留地やルーマニア文学、ハンガリー文学と連携を計ろうとする試みもなされた。その意味で、ジーベンビュルガー・ザクセン人の文化営為を知るためばかりではなく、ドイツ系住民居留地間に成立した初期の交流を窺い知るうえでも貴重な資料である。この他、シビウで刊行された著名な文化雑誌『クリングゾール(Klingsor)』(1924-1939)やティミショアラで刊行された季刊誌『バナート・ドイツ文化誌(Banater deutsche Kulturhefte)』(1927-1931)がある。前者の収蔵数はわずか4冊であるが、創刊号が含まれている。後者は10冊ある。

社会主義時代の雑誌では『人民と文化』および『年鑑 新しい道』が重要である。『人民と文化』は社会主義教育文化評議会等が編者となっている月刊文化雑誌で、美術や音楽、演劇、文学等、ドイツ系マイノリティの文化営為全般を理解するために重要な資料である。1977-1981年は全号揃っている。『新しい道』は社会主義体制となったルーマニアで最初に刊行されたドイツ語新聞で、その年鑑が1960年から1989年

まで、5冊を除いて揃った。この他、『一緒に(Komm mit)』という年1回刊行のドイツ系住民向け旅行雑誌も1970年から1989年まで、2冊を除いて所蔵している。



『人民と文化』

b) 図書資料

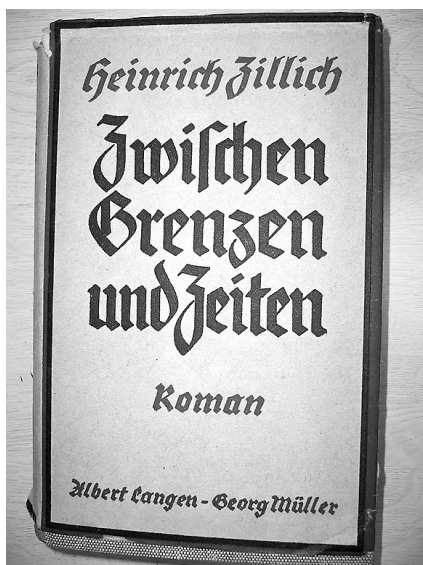
図書については、各住民居留地のうち、ジーベンビュルゲンおよびバナート出身の新旧詩人や作家の詩集、散文集、小説類が多い。しかし、数は少ないだがブコヴィナ出身の詩人たちの重要な詩集も含まれている。全居留地を通じて、時代的には両次大戦間期かそれ以前から活動していた詩人や作家の著書に収集の重点がおかれている。当時刊行された著書も多い。

ブコヴィナ出身のユダヤ系詩人たちについては、ツェランやアウスレンダーの存在が大きな影響を与え、ドイツやオーストリアでは、他の居留地の詩人や作家たちより受容が進んでいる。そのため、彼らの作品は新刊図書として入手可能になるものが増えている。特に、アーヘンのランボー社からシリーズとして順次刊行されていることが大きい。しかし、ジーベンビュルゲンやバナートの両次大戦間期以前の作品については、ルーマニア国内では刊行されていたが、ドイツやオーストリアでの再刊は今のところ

る目処が立っていない。そのため、今回の資料受け入れまで、本学でもその部分の基礎資料は非常に貧弱だった。同郷人会系研究機関関係者による二次文献はある程度そろっているにもかかわらず、重要な詩人や作家の著書が入手できない事態となっていたのである。今回収蔵された資料だけではまだ不十分だが、基礎資料充実のために、重要な部分を補強することができた。

また、全体としては旧世代に重点があるとはいえ、戦後生まれの詩人や作家たちの著書にも目配りはされている。とりわけ、反体制と当局にみなされた詩人たちが1970年代に刊行した詩集が複数収められている。現在もドイツで活躍する詩人たちの最初期の活動を知るうえで興味深い資料である。

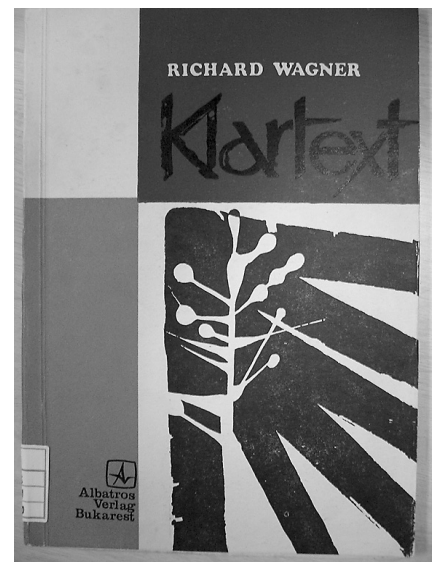
以下、主立った詩人や作家に関する本学所蔵資料を紹介したい。



ツィリヒ『様々な国境と時代の狭間で』

- ・アドルフ・メッシェンデルファー(Adolf Meschendörfer, 1877-1962) 6冊
- ・ハインリヒ・ツィリヒ(Heinrich Zillich, 1898-1988) 10冊
- ・エルヴィン・ヴィトシュトック(Erwin Wittstock, 1899-1962) 11冊
- ・アーダム・ミュラー＝グッテンブルン(Adam Müller-Guttenbrunn, 1852-1923) 12冊

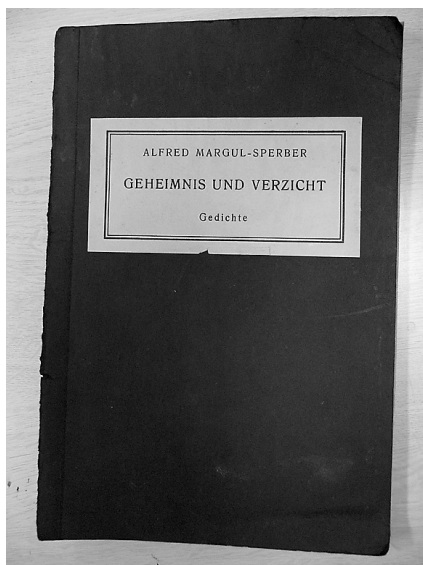
メッシェンデルファーは『カルパチア山脈』誌を、またツィリヒは『クリングゾール』誌を主宰したジーベンビュルゲン出身の詩人・作家である。前者は散文、評論、戯曲、抒情詩と幅広い活動を行っているが、特に1927年発表の詩「ジーベンビュルゲン哀歌(Siebenbürgische Elegie)」で知られている。ツィリヒも数多くの小説等を執筆しており、1930年代以降はナチズムに大きな影響を受けたとされている。その意味で、小説『様々な国境と時代の狭間で(Zwischen Grenzen und Zeiten)』(1936)等入手できたことは、興味深い。ミュラー＝グッテンブルンは、バナートのドイツ系住民にとって政治的にも重要な意味を持った「バナート・シュヴァーベン人の歌(Banater Schwabenlied)」の作者であり、バナートを代表する作家である。1908年に刊行され、当時ドイツ語圏で版を重ねたといわれる著書『邪神の黄昏 今日ハンガリーの文化像(Götzendämmerung. Ein Kulturbild aus dem heutigen Ungarn)』や代表作『ヤーコプ親方とその子供達(Meister Jakob und seine Kinder)』等、重要な資料を揃えることができた。



ウァーグナー『分かる文章』

- ・ヴェルナー・ゼルナー(Werner Söllner, 1951-) 2冊
- ・リヒャルト・ヴァーグナー(Richard Wagner, 1952-) 5冊

戦後生まれの世代では、ジーベンビュルゲン出身のゼルナーとバナート出身のヴァーグナーの処女詩集『天気予報(Wetterbericht)』(1975)および『分かる文章(Klartext)』(1978)ならびに第二詩集『ある私人が伝えること(Mitteilungen eines Privatmanns)』(1978)および『時計たちの侵入(Die Invasion der Uhren)』(1977)を収蔵したことに触れたい。両詩人とも1950年代前半に生まれ、1960年代後半からはじまる「雪解け陽気」期に多感な時期を過ごし、1970年代前半から詩作活動を本格化させるが、「社会の革新」を志向することで当局に反体制と見なされ、1980年代に西ドイツへ出国した。作曲家と同姓同名のヴァーグナーは、1972-1975年に活躍し、文学を通じて自由化を進めようとしたため主要メンバーの逮捕に至った「アクショングループ・バナート(Aktionsgruppe Banat)」のリーダーだった。戦後生まれの詩人や作家については、前述したミュラーのように現在ドイツで活躍している作家も多く、作品自体は新刊として入手しやすい。ただしルーマニア時代の著書は発行部数も多くないので、その意味で貴重である。



マルグル＝シュペルバー『秘密と諦念』

- ・アルフレート・マルグル＝シュペルバー(Alfred Margul-Sperber, 1898-1967) 2冊
- ・アルフレート・キットナー(Alfred Kittner, 1906-1991) 1冊

少数だが、重要なブコヴィナ出身の詩人たちの著書も入手できた。なかでも、両次大戦間期のブコヴィナで、また戦後はブカレストでドイツ語文壇の中心的存在であったマルグル＝シュペルバーが、ユダヤ人への出版禁止措置に抗し、ブコヴィナの州都チェルノヴィツで1939年に自費出版した500部限定の第二詩集『秘密と諦念(Geheimnis und Verzicht)』が含まれていることは特筆に値する。この詩集はドイツ語圏でもライプチヒのドイツ図書館やクラークンフルト大学図書館等、数少ない図書館しか所蔵していない。また、マルグル＝シュペルバーの没後、1975年に、キットナーにより編集された詩集『秘密と諦念(Geheimnis und Verzicht)』も収蔵された。この詩集には、生前当局の介入を憚って発表されなかった数多くの自然詩も収められており、改めてマルグル＝シュペルバーの詩作全体を包括的に提示している。社会主義体制下で発禁処分を受けていたキットナーが詩人として当局に許容される契機となった1970年の詩集『壺通信(Flaschenpost)』も入手できた。

その他、トランシルヴァニアのザクセン方言文学やバナートのシュヴァーベン方言文学、児童文学、文化史等の資料も所蔵図書には含まれている。これらは、今後詳細に内容を分析されるべき新しい分野の資料である。

基礎資料収集の前途はなお容易ではないが、関係諸氏のご厚意で貴重な一歩を進めることができた。近い将来、これらの資料については文献データベースとして情報を整理し、より使いやすい体制を構築していきたいと考えている。

5 おわりに

本学附属図書館が多岐にわたる研究分野で浩瀚な基礎資料を提供し、研究推進に大きな役割を果たしていることは、論を待たない。筆者のように、ドイツ語圏の文学や文化を研究対象と

している者もまた、その多大な恩恵に浴してきた。主要な詩人や作家たちの作品が必要なときにすぐ入手可能であるのはもとよりであるが、研究を進めるなかで出会った情報が図書館によって検証可能となると、その感を強くする。例えば、東欧出身で同郷人会関係者以外にはほぼ無名の作家が書いた伝記の対象者について、本館書庫に所蔵されている1920年代、30年代刊行の『ドイツ著作家事典』数巻を繙き、記載の有無や内容を確認、その評価の変遷をおぼ

ろげながらも辿ることができたといった場合に、図書館の底力に思いを致すのである。ルーマニア・ドイツ語文学は非常に地味な研究領域ではあるが、それだけに一層、このような基礎研究の意義を認め、支援の手を差し伸べてくれる環境にあることを感謝せずにはいられない。その意味でも、歴代の本学教員が積み重ねてきた基礎資料収集の努力を、自分なりに引き継いでいきたいと、心より願っている。

(ふじた・きょうこ)

検索エンジン主流時代だからこそ必要な図書館利用者教育

工学分館管理係長 米 澤 誠

はじめに

ウェブが学校や家庭に浸透し、何か物事を調べるときは検索エンジンのようなポータルサイトを利用するのが通常となった現在、学生の学習行動はどのように変化しているのでしょうか。

2004年度から取り組んできた全学教育科目の授業支援の経験から、私たち図書館員は、**検索エンジン主流の時代にあわせた利用者教育を行うことで、学生の学習を一層支援しなければならない**と考えるにいたりしました。本稿では、そのねらいと取り組み、成果について報告します。

1. 現代の図書館利用者像

(1) 検索エンジンの使い方

現在、何か情報収集を行うには、まず検索エンジンを使うのではないのでしょうか。私自身も、学術的な調査以外の調べものの場合や、全然知識のない事柄を調べはじめるときには、検索エンジンを重宝しています。

しかし、正確を期する学習や研究を行うときには、検索エンジンから到達したウェブサイトの情報だけではなく、必ず同等の印刷物資料で情報の裏付けをとることとしています。そしてさらに、図書や論文を検索して、それらを主な材料としてレポートや論文を書き上げます。検索エンジンを情報入手の手がかりとして活用することは、非常に効率的だと思います。

教育の現場では、検索エンジンから入手したウェブサイトの情報だけで、レポートを書き上げる学生が多いのではないのでしょうか。これは、授業での学生の行動を見ていた経験から感じたことですが、海外で行った情報利用者の意識調査でもその傾向が明らかにされています。¹⁾

(2) 意識調査に見る利用者像

この意識調査では、83項目にわたって図書館と情報資源に関する設問を行い、約3,500名の英語使用者からの回答を得ています。回答者は大学生だけではなく、14才から65才以上の利用者まで幅広い年代にわたっていますが、設問によっては大学生に限った集計も行っています。

探索しようとする情報源としては、検索エンジンが91%、図書館が55%となっています。しかし、実際に最初に選択するものとしては、検索エンジン80%、図書館11%と圧倒的に検索エンジンが優勢です。(図表1)

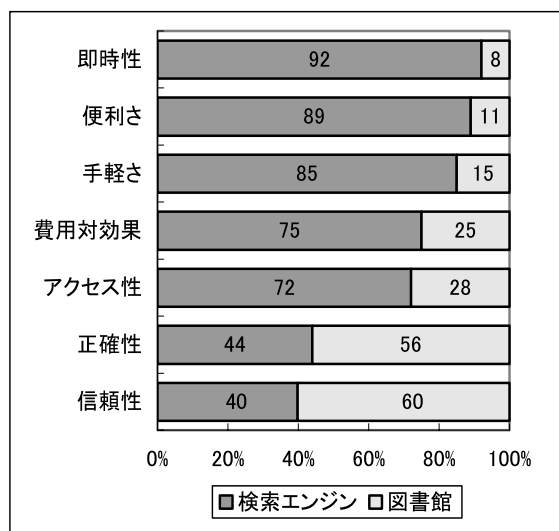
図表1. 考慮する情報源・最初に選択する情報源

考慮する情報源	割合	最初に選択	割合
検索エンジン	91%	検索エンジン	80%
図書館（実際の）	55%	図書館（実際の）	11%
オンライン図書館	42%	オンライン図書館	6%
書店（実際の）	37%	書店（実際の）	2%
オンライン書店	30%	オンライン書店	2%

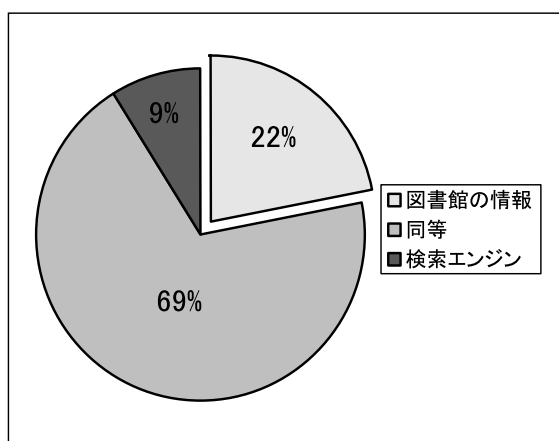
検索エンジンと図書館の優位性の比較では、信頼性と正確性の点で、検索エンジンよりも図書館が優れているという結果ですが、その差はわずかなものです(信頼性：検索エンジン40%、図書館60%。正確性：検索エンジン44%、図書館56%)。これに対して、即時性、便利さ、手軽さ、費用対効果、アクセス性の面では、圧倒的に検索エンジンが高い評価をえています。(図表2)

そして、情報としての信頼度においては、図書館資料の情報がより高いとするもの22%、ウェブサイトの情報とするもの9%となっており、まだこの面に関しては図書館資料に優位性がある

るといえます。しかし、どちらも同等が69%ということは、78%の利用者がウェブの情報を信頼して使っているということを意味し、必ずしも楽観視できない状況になっているといえます。(図表3)



図表2 検索エンジンと図書館の優位性の比較



図表3 情報としての信頼性が高いのは

そして、大学生の回答中の「情報の信頼度を判断する要素」を見ると、自分の知識・常識が83%、発信サイトの企業・組織が69%で、複数サイトからの情報は71%、信頼できる情報源の推奨が68%、サイトの専門的見かけ42%、著者46%となっています。印刷物を含めて**信頼できる複数の情報源を比較するという、基本的な学習方法の認知度が低下しつつある**のではないかと

と危惧しています。

2. 学習一般における情報探索の重要性

(1) 主体的学習能力の必要性

大学で学ぶためには、授業内容にそって教員が教授する知識を身につけ、提示されたテキストや参考書を読んで理解することが、まず最も重要です。

しかしまた、自分自身で関連資料を探し、さらに知識を広く深めることも重要です。この情報探索と収集の能力を身につけることで、どのような分野の事柄でも、主体的に学習することができるようになるのです。大学生としては、一日も早くこのような受け身ではない学習能力を身につけることが望ましいのではないのでしょうか。これは社会人となっても、有用なスキルとなるものであることは、私自身の経験からも明らかです。

(2) レポートを書くための情報探索

一般的に、よいレポートや論文を書くためには、レポート作成技術を身につけるとともに、レポート作成のために信頼性が高く充実した内容の資料を探し出すことが重要です。そのためには、検索エンジンでウェブ上の情報資源を探すだけではなく、印刷物として世に公表された資料を使う必要があります。一定の評価をえた著者が執筆し、定評のある出版社から出版された資料の重要性を再認識する必要があるのではないのでしょうか。

また、課題に関する基礎的な知識を理解し、情報収集の方向性を決めるには、まず百科事典や専門事典、そしてその分野の入門書にあたってみることが有効です。また、資料1点だけではなく、別の観点から別の著者が書いた複数の資料を読むことにより、多面的に問題を考察した、説得力のあるレポートを作成することができるようになります。

そして、図書館にある（もしくはウェブで図書館が提供する）豊富な資料の中から、必要とする事典、図書、雑誌論文などを効率的に的確に探し出すためには、図書館資料の種類と情報探索の技術について知っておく必要があるのです。

上記のような考え方のもとに情報探索のスキルをもつだけで、レポート作成の能力は格段に向上するはずです。「よいレポートを書くためには、よい材料を探し出すことが肝心」なのです。

(3) 全学教育科目での授業支援

以上のような問題意識のもと、2004年度から全学教育科目「大学生のための情報検索術」の授業支援を行っています。

この授業の実習補助などを通じて、私たちは現代の学生がどのような情報行動をとるのかを実感することができました。また、情報探索について学生がどの程度の知識と技術を持っているのか、どのような情報リテラシー教育を求めているのかなどの状況を知ることができました。^{2) 3)}

そのような経験の中で、このようなプログラムがどの程度の成果をあげているのかを測定することが、今後の授業内容の改善に繋がり、また、この種のプログラムの必要性を検討する材料になると考えるようになりました。

3. 全学教育科目での成果測定

(1) アンケート調査の結果

この種のプログラムの有効性を検証するため、2005年度第2セメスター（後期）の全学授業科目「大学生のための情報探索術」の受講者に対して、図書館と情報検索ツールの利用機会についてのアンケート調査を実施しました。⁴⁾

この授業は、レポートを作成する技術と情報探索の技術を、半年の講義と実習で身につけることができるように構成した授業です。2005年度は新たな試みとして、レポートを作成するためのアウトラインを中間時点で提出してもらい、それを基点として資料収集やレポート作成を進めて行くという手法を取りました。2005年度当初の履修者は140名となっています。

まず、第2セメスターの同じ時間帯の別の授業を履修している学生に対してアンケート調査を行いました。調査内容は、図書館と情報探索ツールの利用頻度に関する設問からなりますが、ここでは情報探索ツールの結果だけを示し

ます。検索エンジン以外の情報探索ツールを利用する学生もいましたが、第1と第2セメスターの変化はほとんどありません。(図表4)

図表4 情報探索ツール利用機会の変化（別授業）

利用内容	セメスター	0回	1回	2～5回	6回～
検索エンジン	第1	5		2	22
	第2	5		2	22
蔵書目録検索	第1	15	3	4	7
	第2	14	3	6	6
文献データベース	第1	22	2	2	3
	第2	24		2	3

これに対して、本授業の受講者からは以下のような結果を得ることができました。授業を受講していなかった第1セメスターに比べて、第2セメスターに入ってから情報探索ツールの利用機会が格段に多くなっていることが分かります。(図表5)

図表5 情報探索ツール利用機会の変化（本授業）

利用内容	セメスター	0回	1回	2～5回	6回～
検索エンジン	第1	3		10	71
	第2	1		10	72
蔵書目録検索	第1	34	2	17	31
	第2	12	11	25	35
文献データベース	第1	69	5	4	6
	第2	37	11	26	9

蔵書目録検索を利用した学生は、全受講者の56%から80%に上昇、文献データベースを利用した学生は17%から52%に上昇しています。これに対して別授業の受講者では、それぞれ51%、24%にとどまっています。

また、『『地震』に関する図書を見つけ、入手する手順を記述せよ』という設問に対しては、本授業の受講者の35%が検索から入手までのプロセスを答えることができています（別授業では17%）。これに、何らかの形で蔵書目録を使うと記述した回答を加えると、受講者全体の87%が蔵書目録の必要性を認識しています（別

授業では62%)。本授業は、学生の情報探索行動に確実に影響を及ぼしていることが分かります。

(2) 成果評価の試み

このような形で、学生の学習能力の向上に成果を残したことを数値的に測定する「成果評価（アウトカムズ・アセスメント）」の活動は、欧米の大学を中心に活発化し注目を集めているところです。⁵⁾

またアセスメントの一つとして、アネクドテ・エビデンス（逸話的証言）という手法があります。これは、自由記入の回答などを列挙する手法で、統計的調査だけでは伝わらない生の声を示すことができます。本授業に対しては、次のような評価がありました（「レポート作成法」に関する評価は省略）。

- ・実習形式が良かった。最後のレポートを書くのに役立った。
- ・いただいた資料、以後役に立てるべくとっておきます。
- ・色々なデータベースの存在を知ることができよかった。
- ・こんなに色々な検索サイトがあるとは知りませんでした。きっとこの講義を取っていなければ、この先も知らなかったかもしれません。
- ・普通のサーチエンジンとWikipediaぐらいしか使ったことがなかったので、色々な方法を知ることができてよかったと思う。（同意見1件）
- ・まだ使いこなせないツールも多かったが、将来的には絶対役立つ授業でした。
- ・とても役に立つ知識をえることができたと思います。
- ・授業を取らなかったら損したかは分かりませんが、取ったことで確実に得をしたと思います。
- ・この授業は第1セメスターからやったほうが良いと思います。（同意見2件）
- ・これからの大学生活をもっと充実させるのに役立つ授業でした。第1セメスターからこんな授業があれば良かったと思います。ありがとうございました。

わが国でも、ようやく成果評価に注目する活動が現れつつあり、今後本学の成果も広く公開することで、大学図書館における学習支援の活動を活性化したいと思います。

さいごに

以上、図書館利用者教育を通じた学習支援の取り組みについて紹介しました。

最後に繰り返しますが、**検索エンジンとウェブ上の情報の特性と利便性を理解しつつ、図書館で提供する資料や各種検索ツールを上手に使える学生を育てることが、大学教育の重要な目標の一つ**なのではないでしょうか。

情報探索ツールとしてはせいぜい検索エンジンぐらいしか視野に入れていない高校の「情報」教育の実態を知り、検索エンジン主流の時代だからこそ学生に身につけて欲しいことを考え続けてきました。

そのような観点から、本授業の教科書として作成した『東北大学生のための情報探索の基礎知識・基本編』⁶⁾や、別に新入生向けの入門書として作成した『図書館のすすめ』⁷⁾および本稿が、本学の授業プログラム検討の参考となれば幸いです。

参考文献：

- 1) Perceptions of libraries and information resources : a report to the OCLC membership, OCLC, 2005. 11,
<http://www.oclc.org/reports/2005perceptions.html>
以下に示す統計表は、全てこの報告書による。
- 2) 全学教育科目「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」を開講、木這子, Vol.29, No.3, 2004
- 3) 永井伸, 全学教育科目「大学生のための情報探索術」にスタッフとして参加して、木這子, Vol.29, No.4, 2005
- 4) アンケート内容は、米国ザ・シタデル（サウスカロライナ士官学校）ダニエル図書館で新入生に実施した内容に合わせた。
- 5) Perter Hernonほか, 図書館の価値を高める：成果評価への行動計画, 丸善, 2005
- 6) 東北大学附属図書館, 東北大学生のための情報探索の基礎知識・基本編, 2006 (2006.4刊行予定), <http://www.library.tohoku.ac.jp/mylibrary/tutorial/>
- 7) 東北地区大学図書館協議会, 図書館のすすめ：大学図書館利用ガイド, 2005,
<http://www.library.tohoku.ac.jp/tohokuchiku/susume.html>

（よねざわ・まこと）

眠り猫に鳴き猫

加齢医学研究所 猫 三毛夫

商議会とか商議員という呼称を知ったのは、猫が加齢研選出の委員として会議に出席した3年前が始めです。図書館が“商”とは何事であろう、商売している様にも見えないしと、不思議に思ったものでした。会議が始まりますと、不思議はさらに深まります。と申しますのも、医学系の猫には疎遠な内容ばかりだからです。例えば本学図書館には文豪の漱石文庫、或いは江戸時代の和算書といった、学術的価値の高い資料が所蔵されているとのことです。近々それらの展覧会が開催予定であることが、会議で報告されます。関連の研究者にとっては興味津々たるものがありましょう。一方、図書館とは本や雑誌を並べている所、もしくは電子ジャーナルの中継口、ぐらいの認識しか持たない劣等猫には、漱石や和算と聞かされても猫に小判。長い報告を聞くうちに、ついまぶたが重くなるのは如何ともし難いものがあるのです。それに対し図書館専門職の方々は、居眠り猫でさえも教育してあげようと、様々に活動しておられます。このキボコ誌も、広報努力の一環なのでありましょう。本学に居を構える1000研究室の隅々まで、猫にまで、配りに配る図書館員の熱情には頭の下がる思いです。しかしながら本誌を手にする猫はと言えば、「キボコ紹介のマルクス資本論初版本って何の事？ 稀覯本というけれど、要するに古本のことじゃないの？ 関係ないや。」哀れ、キボコ誌はゴミ箱行きとなります。

会議で目の覚めるような議題がない訳ではありません。図書購入経費の部局負担割合の問題などは、その一例です。そこでは6億円超の経費を、どの様な方針の下にどの部局がどれ位の額を負担するかが話し合われます。この時ばかりは猫も居眠りから醒め、目を凝らして配布資料に見入り、せわしなく計算などしてしまいます。何となれば、自分が図書・電子ジャーナルのサービスを享受している事実など忘却の彼方、部局単位でいえば何千何百万円の持ち出しになるのかだけが心配だからです。我が加齢研

の負担額が増大しそうな案などもっての他です。どの猫面を下げて加齢研に戻り教授会で説明、皆に納得してもらえましょう。しかしながらここは商議会、出席の委員は学問の研鑽を積んでこられた立派な先生方ばかりです。部局損得丸出しの弁は、浅はか猫であっても口に出すのは憚りがあります。仕方がありません、猫といえども研究者の端くれです。医学分野における図書経費の特殊性につきニャンニャン鳴き立て、加齢研の負担を少しでも回避できるよう、議論をでっち上げることにしましょう。無学の猫が偽装戦術に走る位ですから、学識深い先生がより高等な戦術を駆使するのは勿論です。

こうして部局を代表する委員同士が猫も混えて丁々発止と議論をすれば、2時間打ち止めの商議会で結論が出るはずありません。商議会の下に小委員会、それでも足りずにさらに下のワーキング・グループが作られていきます。エレベーターを降りながら、費やす会議の時間は膨大です。でも、へこたれる訳には参りません。何と言っても出身部局のエゴが、猫の肩にかかっているのですから。そんなこんなを経ながらもようやく意見の一致を見れば今度は、ワーキング・グループから小委員会へ、小委員会から本場所、商議会へとエレベーターを昇らねばならないのです。忙しすぎて狸、いえ猫寝入りできる暇などありません。

そうか、お金の議論をするから“商”で、商だから“商議会”なのだ、ようやく猫にも納得がいった次第です。でもなあ、そんな理解で宜しいのでしょうか。教養の無い猫は、漱石と聞かされても「猫がどうした」の小説くらいしか思い浮かびません。実力も無い猫には、和算と聞かされても微積分など解けません。でもやっぱり、お金の話よりかは文学・数学の方が大学らしいかなあ。どれどれ猫も、もう1度キボコ誌をゴミ箱から拾い出し、熟読玩味することに致しましょう。

(文責 佐竹正延 さたけ・まさのぶ)

連載「江戸の食文化」を巡る話題から（２）：江戸の庶民の食事情 —食卓から外食まで—

閲覧第一係 後 藤 敏 行

はじめに

平成17年度企画展「江戸の食文化」展示の第2部（江戸庶民の食事）での内容を中心に、庶民の食事情を紹介しましょう。

まず、食に関する江戸の特徴を概観し、続いて庶民の食卓の様子、さらに外食産業の発達について述べていきます。

1.江戸の特徴

上方の優勢

江戸は長い間、食文化の後進地でした。もともと発達していた京都に加え、「天下の台所」と称された大坂の発展が進み、1700年前後には食文化で上方が江戸を圧倒します。優れたものは「下りもの」（上方から江戸に下ってきたもの）と言われました。その対語が「下らないもの」になります。

江戸前の味

それでも江戸時代中期以降、流通網の発達などの経済活性化によって、江戸の食文化は独自の発展を始めます。人口が増えるにつれ、多くの有機物が江戸湾に流入し、豊かになった海で多くの魚介類が採れるようになりました（「江戸前」）。それを材料として濃口醤油で味付けしたところに、江戸の味が生まれました。鮎、天麩羅、鰻の蒲焼き、佃煮などが、現在まで親しまれています。

江戸わずらい

ところで江戸は、仙台や北越などから大量の米が流入する大消費地であったため、各地に精米のための水車小屋が建てられていました。精白した米を貧乏人まで食し、上方のうどん文化や地方の雑穀食と大きく異なっていました。白米偏等の食事はビタミンB不足を招き、脚気にかかる者も多かったようです。原因不明ながら他の土地に移ると治ることから、「江戸わずらい」と呼ばれていました。

2.庶民の食卓

食卓風景

食事は1人ひとりが自分専用のお膳でとっていました。ちゃぶ台などで家族が食卓を囲むようになったのは明治期以降のことです。



坂田の町（山形県酒田市）の大問屋の食事風景
（井原西鶴『日本永代蔵』貞享5年より）

内容に目を向けると、明暦の大火（1657年）以降1日3食が広まり、主食・副食・味噌汁の組み合わせが元禄年間（1688-1703）に定着します。しかし、おかずは僅かで、米が主なエネルギー源でした。当時の成人男子は1日に平均5合（750g）の米を食べていた、とのことでした。

米は白米が、元禄年間、庶民にも普及します。麦飯も人気で、山芋をすった「とろろ」を合わせて食しました。凶作になれば、その他雑穀も食べていたようです。

朝昼夕の代表的メニュー

朝食：飯、味噌汁、漬物。納豆が加われば言うこと無し。(米は朝にまとめて炊き、飯びつに入れ、昼も夜も食べる。)

昼食：冷や飯に朝の残りの味噌汁。あるいは、江戸後期になると、屋台で外食の場合も。

夕食：飯（冷えているので、お茶漬けにする場合も）、焼き魚、野菜の煮物。

なお、納豆は、包丁で叩いて細かくし、豆腐や菜っ葉を菜味とともに添えた「叩き納豆」が人気でした。それを鍋に入れて「納豆汁」にして食べたようです。

また、漬物は現代と同じくらい種類が豊富でした。練馬大根で知られる練馬村の農家では、1年分を漬けて宅配する産直サービスが存在しました。



漬物の作り方を記した本

(小田原屋主人『四季漬物塩嘉言』天保7年より)

3. 外食産業の発達

背景

江戸は世界的にみても、もっとも早くから外

食文化が発達した都市でした。主な理由には、江戸が非常に男性の多い都市であったことが挙げられます。

街は単身赴任の大名家臣団、一旗あげようとやってきた者たち、近郊農村からの出稼ぎや無宿人でにぎわいました。くわえて、火事の多い都市であった江戸には、復興工事をおこなう大工や左官、鳶などの職人や人足も多く集まっていました。全国各地からやってきた男性たちが手軽に食べられるものとして発達したのが、料理屋や屋台、振売り（棒手振）などの外食産業です。

そうしたなか生まれたのが、江戸前の4大料理と呼ばれる、「蕎麦」「鮎」「天麩羅」「鰻の蒲焼き」です。

蕎麦

蕎麦そのものは古くからありましたが、麺状にして食べるようになったのは江戸時代の半ば頃からです。江戸っ子がもっとも好んだ料理であり、蕎麦屋は1, 2町（1町は約109m）ごとに1軒あった、とも言われています。

鮎

現在のような「握り鮎」が登場したのは江戸時代後半です。それ以前は、飯と魚を酢で発酵させた「なれずし」でした。握り鮎には、鶏卵焼・車海老・海老そぼろ・白魚・まぐろ・こはだ・あなご・のり巻きなどがありました。

天麩羅

「天麩羅」はもともと南蛮料理として日本に伝わったものでした。「天麩羅」の名前は戯作者の山東京伝が名付けの親、という俗説もあります。東京湾でとれた小魚が格好のタネで、車海老・あなご・ぎんぼう・いか・はぜ・きす・白魚・貝柱の天麩羅などがありました。天麩羅は主に屋台で食べるもので、1つ4文という安さでした。



天麴羅の屋台。右の小僧は握り鮓を食べている
(山東京伝『江戸春一夜千両』天明6年より)

鰻の蒲焼き

元禄ころに上方で生まれた料理で、正徳(171~1716)ころに江戸に伝わりました。鰻の背を開いて蒸すのは江戸独特の調理法です。蒸すことで脂分が抜け、あっさりとした仕上がりとなります。ちなみに、土用の丑の日に鰻を食べると精がつくというのは、蘭学者の平賀源内が不況の鰻屋のために提案した販売戦略だった、と言われています。



鰻の蒲焼屋の店内
(山東京伝『唯心鬼打豆』寛政4年より)

4.まとめ

以上、独自の食文化を江戸が発展させたこと、白米を庶民も食していたこと、1日3食の習慣や江戸の4大料理の普及、などをみてきました。朝昼夕の代表的メニューは粗食であり、かつ、バランスの取れたもののようによみえます。また、発達した外食文化も、その内容は自然の素材を活かした、健康的なものであると言えるのではないのでしょうか。

現代は成人病予防の観点などから「食」への関心が高まっています。もしかすると、望ましい食生活のヒントが江戸の庶民の食事情から得られるのかもしれませんが。

参考文献

- 1)江戸遺跡研究会編、『江戸の食文化』,吉川弘文館,1992
- 2)大久保洋子,『江戸のファーストフード—町人の食卓,将軍の食卓』,講談社,1998
- 3)棚橋正博・村田祐司編著,『絵でよむ江戸のくらし風俗大事典』,柏書房,2004
- 4)松下幸子,『図説江戸料理事典』,柏書房,1996
- 5)渡邊信一郎,『江戸の庶民が拓いた食文化』,三樹書房,1996
- 6)渡辺善次郎,『巨大都市江戸が和食をつくった』,農村漁村文化協会,1988

(ごとう・としゆき)

「平成17年度東北大学総長教育賞」を受賞



3月24日（金）の「平成17年度東北大学学位記授与式」において、当館の「情報探索マニュアル作成ワーキンググループ」の活動が「東北大学総長教育賞」を受賞しました。

「東北大学総長教育賞」は、平成15年に制定され、「東北大学の教育理念達成のため、教育方法及び教育技術の向上を図り、優れた教育を推進することを目的として、全学教育、学部専門教育及び大学院教育における授業及びその支援並びに課外活動、国際交流等における指導、教育方法及びその支援等について優れた業績を挙げた者や相違工夫に溢れる取り組みにより大きな教育上の成果を挙げた者」を表彰する趣旨が謳われています（「東北大学総長教育賞要項」より抜粋）。

当館の活動はこのうちの全学教育授業に関する部分に該当し、東北大学の学生を対象とした「東北大学生のための情報探索の基礎知識」という冊子作成と配布を平成15年度から続けており、平成16年度からはこの冊子をテキストとした全学教育科目を開講しています。

冊子は、大学生として基本的な学術情報の活用方法を知り充実した学生生活を送ってもらうため、平成18年度も継続して新入生に一斉配

布を行っています。その他、各図書館、研究室単位で行う講習会等でも利用され、学生への学術情報活用に関する情報提供に大きな役割を果たしています。

全学授業は、平成18年度で3年目を迎えます。主として一年生が受講しますが、卒論作成を控えた3年生、4年生の受講も見受けられます。平成17年度に実施したアンケートでは、この授業を受講した学生とそうでない学生の間で、情報探索行動に違いが表れているということがわかりました。¹⁾ 実習を多く盛り込んだ授業は、実施する側にとっては準備が大変ですが、このような形で効果が見られたことは非常に喜ばしいことです。18年度は受講者の意見を反映させ、より効果の高い手法を確立していきたいと考えています。

この活動については、同じ平成17年度に「国立大学図書館協会賞」も受賞しており、今回の「東北大学総長教育賞」受賞と合わせ、学内と学外の両方から高いご評価をいただいた形となり、当館にとって望外の喜びとなりました。

最後になりましたが、当館の活動に対して日頃からご理解、ご支援をいただいている学内外の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。今回の受賞に恥じることもないよう、今後も図書館として出来ることを全館体制で取り組んでいきたいと思っています。

（総務課）

参考文献

- 1) 米澤誠．検索エンジン主流時代だからこそ必要な図書館利用者教育．「木這子」．Vol.30, no.4, 2006, p.22-25

附属図書館の概要

この概況は毎年実施される大学図書館実態調査のうち主な項目をとりまとめたものである。表1は平成13年度～平成16年度の概況，表2は平成16年度部局別のものである。

表1

区 分		平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
蔵 書	和	1,850,223	1,865,844	1,892,573	1,769,031
	洋	1,804,020	1,818,812	1,822,816	1,844,161
	計	3,654,243	3,684,656	3,715,389	3,613,192
所蔵雑誌数	和	31,517	32,891	33,404	34,157
	洋	37,797	36,963	36,952	37,873
	計	69,314	69,854	70,356	72,030
年間受入数	和	36,923	35,948	41,768	36,907
	洋	29,695	26,439	24,922	23,418
	計	66,618	62,387	66,690	60,325
年間雑誌受入数	和	11,764	11,713	11,924	11,396
	洋	8,010	7,563	7,271	7,072
	計	19,774	19,276	19,195	18,468
奉仕対象者数	学 生	18,329	17,315	18,439	17,716
	教 官	2,571	2,645	2,589	2,026
一人当り奉仕対象	蔵書数(冊)	174.8	184.6	176.7	18.3
	年間受入冊数(冊)	3.2	3.1	3.2	3.0
	図書館資料費(千円)	42.0	44.3	42.1	43.8
図書館職員数	総 数	135	134	135	126
	専 任	68	65	64	62
	臨 時	67	69	71	64
図書館職員1人当り奉仕対象者数		154.8	149.0	155.8	156.6
図書館資料費(千円)		877,030	884,574	866,268	905,901

表2

部局		職員数() は定員外職員 の内数	蔵書(冊数)				雑誌(種類数)				図書(冊数)				雑誌(種類数)				16年度経費				施設(平成17年3月31日現在)			
			図書(冊数)		雑誌(種類数)		図書(冊数)		雑誌(種類数)		図書(冊数)		雑誌(種類数)		図書(冊数)		雑誌(種類数)		図書(冊数)		雑誌(種類数)		図書(冊数)		雑誌(種類数)	
			計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋
本館	本館	50 (24)	930,853	562,659	368,194	22,540	14,223	8,317	15,138	10,304	4,834	3,332	2,512	820	46,817	16,020	102	62,939	385,018	1,141	18,215	5,706	4,729	1,750,000		
	文学	2 (2)	438,879	283,667	155,212	2,380	1,281	1,099	8,856	6,520	2,336	1,256	683	573	43,442	20,761	366	64,569	4,480	0	68	0	10	5,000		
	教育	3 (3)	103,424	61,804	41,620	1,197	752	445	2,419	1,679	740	511	343	168	11,407	11,210	221	22,838	6,709	17	200	59	107	28,000		
	法学	2 (0)	269,402	122,456	146,946	1,846	1,070	776	4,985	2,791	2,194	1,260	677	583	38,408	17,652	254	56,314	16,543	24	835	42	580	80,000		
館	法実	1 (0)	3,854	3,850	212	36	36	0	3,854	3,850	4	39	39	0	6,723	583	0	7,306	7,227	2	177	21	135	1,750,000		
	経済学	4 (2)	378,636	196,707	181,929	3,589	2,230	1,359	3,234	1,937	1,297	1,902	1,305	597	13,564	35,719	588	49,871	45,724	18	286	46	162	27,000		
	生命	2 (1)	31,082	18,036	13,046	655	362	293	80	4	76	15	7	8	317	3,989	72	4,378	7,158	6	241	86	482	22,000		
	多元研	3 (2)	76,152	19,811	56,341	1,449	375	1,074	553	180	373	187	101	86	1,848	27,799	566	30,213	9,246	11	917	86	482	127,000		
関	流体研	1 (1)	33,858	12,980	20,878	494	79	415	221	41	180	73	32	41	699	9,269	182	10,150	3,415	27	207	70	127	39,000		
	通研	2 (1)	37,303	10,541	26,762	945	377	568	1,416	586	830	373	197	176	6,357	16,924	266	23,547	11,973	40	579	86	381	41,000		
	サイクロ	1 (1)	5,701	869	4,832	100	8	92	39	0	39	10	0	10	0	0	0	0	3,304	4	98	12	35	5,000		
	アジア研	2 (2)	19,173	13,950	5,223	50	35	15	1,704	1,275	429	82	52	30	6,601	3,378	61	10,040	5,415	0	120	0	110	20,000		
係	小計	73 (39)	2,328,317	1,307,330	1,021,195	35,281	20,828	14,453	42,499	29,167	13,332	9,040	5,948	3,092	176,183	163,304	2,678	342,165	506,212	1,290	21,943	6,214	7,340	3,894,000		
	金	5 (3)	79,071	17,180	61,891	1,389	406	983	1,261	392	869	334	177	157	13,565	30,715	1,722	46,002	26,529	30	534	154	253	65,000		
	中	78 (42)	2,407,388	1,324,510	1,083,086	36,670	21,234	15,436	43,760	29,559	14,201	9,374	6,125	3,249	189,748	194,019	4,400	388,167	532,741	1,320	22,477	6,368	7,593	3,959,000		
	医学分館	19 (11)	409,651	157,247	252,404	14,901	4,852	10,049	6,306	3,004	3,302	3,170	1,760	1,410	64,448	138,111	292	202,851	105,265	327	4,025	464	2,190	520,000		
小	北青葉山分館	11 (6)	355,896	72,052	283,844	8,542	1,818	6,724	4,122	972	3,150	1,984	768	1,216	9,164	131,464	309	140,937	64,864	248	3,356	1,140	1,310	309,000		
	工学分館	18 (7)	311,766	145,342	166,424	7,287	3,269	4,018	4,173	2,186	1,987	2,367	1,563	804	27,678	104,806	0	132,484	88,459	384	5,355	2,460	605	300,000		
	農学分館	6 (2)	128,491	69,880	58,611	4,630	2,984	1,646	1,964	1,186	778	1,573	1,180	393	3,912	35,555	1,995	41,462	36,495	105	1,279	317	418	119,000		
	小計	54 (26)	1,205,804	444,521	761,283	35,360	12,923	22,437	16,585	7,348	9,217	9,094	5,271	3,823	105,202	409,936	2,596	517,734	295,083	1,064	14,015	4,381	4,523	1,248,000		
合	合計	132 (68)	3,613,192	1,769,031	1,844,369	72,030	34,157	37,873	60,325	36,907	23,418	18,468	11,396	7,072	294,950	603,955	6,996	905,901	827,824	2,384	36,492	10,749	12,116	5,207,000		

会 議

◎学 内

18. 1. 30 平成17年度第7回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 東北大学附属図書館規程等の改正について
- 2) 東北大学附属図書館等におけるハラスメントの防止等に関する内規の制定について
- 3) 東北大学附属図書館（本館）防犯カメラ装置の運用及び管理に関する内規の整備について
- 4) キャンパス間資料搬送サービスの整備について
- 5) 図書共通経費検討ワーキンググループからの答申について
- 6) その他

・報告事項

- 1) 本館で発生した不祥事について
- 2) 平成17年度第1回貴重図書選定委員会について
- 3) 齋藤養之助家史料に関する懇談について
- 4) 国立情報学研究所における平成18年度遡及入力事業について
- 5) その他

18. 2. 23 平成17年度第8回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) キャンパス間資料搬送サービスの整備について
- 2) その他

・報告事項

- 1) 附属図書館事務部長の内示について
- 2) 総長教育賞候補者の内定について
- 3) 図書共通経費検討ワーキンググループからの答申について

- 4) 平成17年度第1回出張・研修報告会について

- 5) 電子ジャーナルの不正アクセスについて

- 6) 附属図書館（本館）防災訓練について

- 7) 図書資産の実査について

- 8) その他

18. 3. 16 平成17年度第9回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 学術情報整備費の共通経費化について
- 2) キャンパス間資料搬送サービスの整備について

- 3) 平成18年度附属図書館自己点検・評価について

- 4) 平成19年度概算要求事項について

- 5) 平成18年度総長裁量経費の要求事項について

- 6) その他

・報告事項

- 1) オンライン・レファレンス・システムの運用について

- 2) 東北大学附属図書館（本館）防犯カメラ装置の運用及び管理に関する内規について

- 3) その他

18. 1. 30 平成17年度第4回附属図書館商議会

・協議事項

- 1) 東北大学附属図書館規程等の改正について

- 2) 東北大学附属図書館等におけるハラスメントの防止等に関する内規の制定について

- 3) 東北大学附属図書館（本館）防犯カメラ装置の運用及び管理に関する内規の整備について

- 4) 図書共通経費検討ワーキンググループ

東北大学附属図書館

からの答申について

5) その他

・報告事項

1) 本館で発生した不祥事について

2) 平成17年度第1回貴重図書選定委員会について

3) 齋藤養之助家史料に関する懇談について

4) 国立情報学研究所における平成18年度遡及入力事業について

5) 各分館からの報告について

6) その他

18. 3. 23 平成17年度第5回附属図書館商議会

・協議事項

1) キャンパス間資料搬送サービスの整備について

2) 学術情報整備費の共通経費化について

3) 平成18年度附属図書館自己点検・評価について

4) 東北大学附属図書館（本館）防犯カメラ装置の運用及び管理に関する内規の制定について

5) 平成19年度概算要求事項について

6) 平成18年度総長裁量経費の要求事項について

7) その他

・報告事項

1) 附属図書館運営会議（第6回～第9回について）

2) オンライン・レファレンス・システムの運用について

3) 避難訓練の実施について

4) その他

人 事 異 動

平成18年 3月31日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
18. 1. 1	医学分館整理係事務補佐員	阿 部 ユ カ		採用
18. 3. 1	附属図書館事務部長	北 村 明 久	長崎大学図書館部長	〃
18. 3.31		佐 藤 正 弘	附属図書館情報管理課長	勸奨退職
〃		早 坂 幸 子	工学分館管理係	定年退職
〃		沼 澤 千 晴	電気通信研究所総務課図書係事務補佐員	任期満了

編 集 後 記

平成18年1月より図書館システムが更新されました。オンライン目録の画面が一新されるとともに、あらたにMy Libraryというサービスがはじまりました。My Libraryは学内限定のサービスですが、従来の貸出予約、文献複写・借用申込み、図書リクエストなどの各種オンラインサービスを統一的に利用でき、これから、あたらしい機能も順次追加されていく予定です。

す。研究に学習に、みなさまのご活用を心よりおまちしております。

さて、今年度も本誌へ数多くの方々からご寄稿いただき、まことにありがとうございました。連載記事も充実しつつあり、よりいっそう親しまれ、愛される館報を目指して努めていく所存です。来年度もまたさらなるご愛読のほど、よろしくお願い申し上げます。(K)

東北大学附属図書館報「木這子」 第30巻第4号（通巻113号）発行日 平成18年3月31日

発行人 北村 明久 広報委員長 諏訪田 義美

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-795-5911, FAX 022-795-5909
URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>